

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.68 2010-4

世界の児童と母性

[特集] 子どもと子どもの文化財

世界の児童と母性

第68号 / 2010年4月

CONTENTS

ひとこと 編集委員長 網野 武博 1

特集 子どもと子どもの文化財

I. 総論—子どもと子どもの文化財の歴史的展開	
子どものころと子ども文化財 立正大学心理学部 教授 片岡 玲子 2	
モノの氾濫の中、失われゆくところ 詩人、子どもの文化研究所 所長、東京家政大学 名誉教授 片岡 輝 6	
II. さまざまな領域の子ども文化財	
子どもと絵本—絵本と子育て・親育ち— 安曇野ちひろ美術館 副館長 竹迫 祐子 ... 11	
映画文化と子どもたち—映画を観ることは別の人生を観ること— (財) 児童健全育成推進財団 鈴木 一 光 16	
子どもと舞台芸術—子どもに媚びない「子供のためのシェイクスピア」 演出家 山崎 清介 21	
III. 子どもに文化財を届けよう	
子どものための文化財とは 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 育成環境課 齋藤 晴美 26	
児童福祉文化財の有効活用システム—子どものための文化財の活用について— 新潟県立大学 准教授 植木 信一 30	
児童館における文化財の活動 東京福祉大学社会福祉学部 教授 鈴木 雄司 35	
IV. 子ども文化財の多様な展開	
児童福祉施設の子どもと文化活動 児童養護施設 八楽児童寮 寮長 太田 一 平 39	
台本の中に飛び込んで遊ぼう！—子ども達といっしょに20年、そしてこれからも— 児童劇演出家 高谷 静治 44	
ああ、マハヤナで過ごした日々は楽しかった！ —子どもたちにそう言わせたい。その思いから演劇コンクールは始まった！ マハヤナ学園撫子園 前副園長 吉澤寿一郎 48	
青二祭で青春ばく進中！—首都圏の高校生300人が作る学校の枠を超えた文化祭 エフエム世田谷ハイスクール Hot パーティー ディレクター、青二祭代表 矢島 悦子 56	
V. 世界の子ども文化	
ストリートからステージへ。アプサラを伝承する子どもたち—NGOに見る保護児童救済活動 児童養護施設 房総双葉学園 園長、前淑徳大学総合福祉学部 准教授 小木 曾 宏 淑徳大学総合福祉学部 OB 橋口 樹 60	
編集後記 担当編集委員 片岡 玲子 65	

次号のお知らせ 第69号特集「里親支援」(予定)
2010年10月1日発行



ひとこと

子どもの文化、子どもの文化財という言葉がもたらすイメージは、それぞれ人によって異なるものがあるでしょう。私の場合、まず鮮明に浮かんでくるイメージは、その人が磨き上げることのできる人間性と感性をじっくりと育てくれる友達、仲間のような存在ということになります。

兎角大人は、文化や文化財は子どもに与えるものという認識をもちがちです。それは、子どもが本質的に持っている「育つ」力を信じるよりも前に、子どもは大人が「育てる」ものという認識をもちやすいことと深く結びついているように思います。このように、子どもを未熟な弱者（マイナー）と受け止める枠組みにこだわる限り、子どもは日々その命をみずから育てている、育てているという認識は育てにくいものです。しかし子どもを深く理解するほど、子どもは大人が考える枠組みとしての文化や文化財を超えて、能動的で闊達な文化への探求を求めている存在であることを実感することができます。

ここに一つの例をあげたいと思います。私はあるとき、福音館書店の創業に携わり、現相談役をされている松居 直氏から、俵万智さんの幼少時代のあるエピソードを直接お聞きする機会があり、また氏が書かれた「絵本・ことばのよるこび」を読み、冒頭に述べたような真の姿がまさに体现されているのだという思いに駆られたことがあります。

彼女は、二～三歳頃にかけて母親に「三びきのやぎのがらがらどん」という絵本を一日に幾度も幾度も読んでもらっていました。おそらく一年以上も読んでもらっていたようです。彼女のお母様は求められる限り、この本をいつもいつも、繰り返し繰り返し読んであげたのです。俵さんは、聞かせてもらっているというよりも、その都度面白く、心躍る楽しさと幸福感が染みわたるほどの体験を重ねる中で、何かが伸びやかに育っていったのでしょうか。松居氏は、こう述べています。『こうして耳から身体の奥深く入ったことばの喜びは、やがて身体から口をついてあふれ出ます。俵さんは三歳のときまだ文字を読めなかったのに、「三びきのやぎのがらがらどん」の文章を一言半句違わないように語ったと書いています。…この「一言半句違わない」というところに、わたくしは共感し納得しました。俵さんは、特別な子どもではなく、これこそすべての幼児に、二歳から四歳の頃に備えられている不思議な力です。』

俵さんの歌の特長は、みずみずしい生命力と言葉に対する感性の豊かさです。それは、文化財を与えられたのではなく、文化財を仲間・友達のような思いで、深く取り込んだことによって、その個性と可能性を開花させることができたのだと思います。子どもは、文化財を通して「育てられる」のではなく、文化財を通して自らの個性や可能性が「育つ」のではないかと、つくづく思うのです。



編集委員長 網野武博

子どものこころと 子ども文化財



かたおか れいこ
立正大学心理学部 教授 片岡玲子

1. 子どもと文化

舞台上で演奏されているのはクラシック音楽。演奏しているのは数十名で編成されたオーケストラ、曲はヨハン・シュトラウス2世の「美しき青きドナウ」をはじめさまざまな名曲。金管楽器がキラリと光ります。

「こどものためのクラシックコンサート」が開かれているのは東京都児童会館ホール。700席あまりのホールは親子連れの聴衆で満員でした。音楽が始まって間もなく、お母さんの膝の上から滑り降りるようにして小さな子どもが1人、2人と通路に…と思う間によちよち歩き、まだ2歳にも間のありそうな幼児が踊るように身体をゆすって調子をとりはじめました。全身をゆすったあまり、バランスをくずしてペタンと床に尻もちをついてはまた立ち上がります。この様子を2階座席から見学していた筆者と大学生たちは、こんな小さな子どもたちがクラシック音楽を十分受け止めていることに感動を抑えられませんでした。気がつけばまわりの子どもたちはこぞってミニ指揮者となり、座席で手をふり、全身で舞台のオーケストラを指揮していたのです。

このような子どものためのコンサートはほかでも開かれることはあるようですが、就学前の乳幼児も会場に入れるところは事実上ほとんどありません。でもここ児童会館のパンフレットでは「開演中にお

子様が泣いたり、ぐずったりした時は、いったんロビーへ出て落ち着いてから、お戻りください」とあります。確かにときどき泣き声があがるものの、心得た親御さんはすぐ子どもを抱えてロビーへ…というわけで、子どもとともに小さな子をもつ親にも楽しめる催しとして開演前は毎回行列ができる人気となっています。

2. 子ども文化財と子どもの健全育成

音楽に限らず、子どもたちは小さくても文化や芸術を感じ、受けとめる力をもとももっているのではないかと思います。子どもに文化を、そして子どものための良質の文化財を確保し子どもたちに届けていくのは大人の役割です。

「すべて国民は児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ育成されるよう努めなければならない」。これは昭和22年にできた児童福祉法の第1条(児童福祉の理念)にかかげられた健全育成の理念です。そして続く児童憲章では「すべての児童はよい遊び場と文化財を用意され、悪い環境からまもられる」とされています。

第2次世界大戦中、日本も含め世界中でたくさん子どもたちが戦争の犠牲となりました。その戦争が終わってすぐ児童のための法律や制度が創られ、遊び場や文化財のことが謳われているのです。食べ

物の確保が大変な時代に、子どもの心を育てる遊びや文化について言及されていることは見直されてもよいのではと思います。

このようにすべての国民は子どもたちに対して、健全に育成される環境の整備に努力することが求められています。健全育成の場としては、都道府県レベルの大型児童館から地域の小型児童館、放課後児童クラブ、児童遊園などが児童福祉法第40条に基づく児童厚生施設として用意されています。児童館での遊びや出版物、映像、舞台芸術、美術展など文化財との接点がふえることは子どもたちの心身の健全な育成に大いに寄与するものと考えられます。

3. 子ども文化財を子どもたちに届けるしくみ

このような児童福祉の観点からみた子どものための文化財を「児童福祉文化財」といい、これを推薦する仕事を厚生労働省社会保障審議会の福祉文化分科会で行っています。この制度は昭和26年にはじまり、平成19年までの58年間に14,000点余の「児童福祉文化財」を推薦してきました。初期には紙芝居なども対象になっていたそうです。時代とともに対象が変化し、現在は出版物(図書、電子ブック)、舞台芸術(演劇、ミュージカル、コンサート、舞踊、その他各種舞台公演)、映像・メディア(映画、放送、ビデオソフト、CD、DVD、PCソフト、美術展、展覧会)の3部門にわかれて審査委員会が設置されており、出版社や劇団などからの申請を受けて審査が行われています。各委員会からは毎年数十点の作品が推薦されています。

平成20年度は特別推薦として出版物6点のほか、舞台芸術部門ではこんにゃく座の「オペラ・ピノッキオ」など4点、映像・メディア部門ではスタジオジブリの「崖の上のポニョ」など5点が選ばれました。

子どものための文化財として推薦されたものは「児童福祉文化財年報」や厚生労働省のホームページで広められています。また財団法人日本健全育成推進財団は「児童劇巡回事業」および「こども映画祭事業」という二つの事業を通し、全国の地域児童館などで推薦された児童劇や映画を子どもたちに見せるときの費用を援助する、という制度を設けています。この事業は先だって政治家による「事業仕分け」の対象となったのですが、予算は満額認められるという結果になりました。

2006年、筆者らはこの事業によって子どもたちに児童劇をみせたり、映画祭を行った児童館に対してその効果や子どもへの影響を聞く調査研究を行いました。調査の内容は別稿に譲りますが、子どものころにとって身近に文化財と接することには意義があり、よい影響をもたらすことを確かめることができました。

しかし全国で当時4693ヶ所あった児童館のうち過去3年の間にこの事業のいずれかを実施することができたのは956ヶ所、2割と少しにしかすぎないということもわかりました。地域の児童館などでの上演は地方自治体の役割でもあると思うのですが、自治体の財政が苦しいといわれる昨今、子ども文化財を子どもに届ける力はどこも十分ではありません。

また巡回になじまない劇場型の文化財については劇場が学校経由で児童生徒を毎年招待する行事(ニッセイ劇場など)や、民間企業提供によるコンサート、地域の親たちによる子ども劇場・おやこ劇場の活動などがあります。東京では夏休みなど学校が休みの期間に集中的な児童劇の上演が行われています。代表的なものが東京都児童館ホールで毎年開かれる「児童青少年演劇フェスティバル」、国立オリンピックセンターを会場とする「子どもと舞台芸

術」など、日本児童・青少年演劇劇団協同組合と行政の連携のもとに、多くの児童劇団が参加して開かれます。また全国各地にもこのようなフェスティバル形式の上演が行われるところがあるようです。

しかし提供される文化財は有料でもあり、子どもにとってそこへのアクセスには家族や学校経由が必要です。そこにもう少し子どもに届きやすいしくみの工夫が必要と感じます。



たくさんの親子が開場を並んで待ちました
(東京都児童会館ホール：2010年2月21日「こどものためのクラシックコンサート」)

4. 舞台芸術と子どものためのホール

出版物や映像文化は内容を繰り返し

見たり検討したりすることができますが、舞台芸術と称されるものはそのときだけの体験であることが多く、いわば一度限りの出会いが特徴でもあります。それだけに良質の作品に出会ったとき、子どもたちはより強い感動や印象を受ける場合があるといえます。

舞台上で演じられるものは演劇のほか人形劇、ミュージカル、オペレッタ、コンサート、ダンス、落語、お笑い、伝統芸能、見るだけではなくときには参加型の舞台もあります。また演劇にしても、少人数の巡回型からシェイクスピア劇、影絵劇、ぬいぐるみミュージカル、オペレッタなど多様な形態がみられます。先に述べた東京都児童会館は渋谷の駅から7分という交通の便のよいところにある都立の大型児童館で、子どものための専用のホールを持っています。ここでは毎月、日曜こども劇場として児童演劇やコンサートが上演され、子どもたちは無料で鑑賞することができます。

ちなみに2010年2月には「森のロルフ」(演劇集団 未踏)、「アクション歌舞劇 西遊記」(劇団 歌

舞人)、「こどものためのクラシックコンサート」(室内楽)、同(オーケストラ)と毎週のようにホールで催しがあり、子どもたちが楽しみました。

このように子どものために専用に使えるホールは全国でも数少ないものと思われます。多くの民間、および公的劇場は主として大人のためのものになっており、ほとんどの場合就学前の児童は入場できません。冒頭にご紹介したように、子どものためにセットされたものであれば子どもたちは十分参加でき、乳幼児の母親にとっての子育て支援にも役立つと考えます。ところがこの児童会館ホールも児童会館そのものの移転閉鎖計画により間もなく廃止される可能性が強いとききます。子どもたちに文化を提供する場として貴重な存在である子ども主体の劇場をぜひ何らかの形で存続してほしいものと願わずにはおれません。

5. 不良文化財について

社会にはこうした子どものために有意義な文化財ばかりではなく、残念ながら子どもの人権を侵害す

る不良な文化財も存在します。平成11年「児童買春、児童ポルノに係わる行為等の処罰および児童の保護等に関する法律」が施行されました。わが国の児童を対象にした児童ポルノ映像や雑誌などは海外にも流出し、特に評判が悪いとの話もききます。

自治体の青少年健全育成条例に基づく審議会などでこのような悪質出版物やビデオなどの排除が良質な文化財の推薦と同時に進められている状況があります。ネット上に子どものポルノ映像を流す例も後を絶ちません。警察庁によれば、2009年の児童ポルノ事件は統計をとりはじめた2000年以降では過去最高となったとのこと。児童ポルノは犯罪であることを改めて周知していくことも必要です。

6. 子どものころを育てるために

—これからの課題と展望

子どもにとって、幼い時期から良質な文化にふれることは子どものころをゆたかに育てることに効果があると考えます。筆者らの調査によっても児童劇や映画を鑑賞したあと、子どもの感情表現が豊かになる、心の安定がみられるといった報告が得られており、同時に文化財の内容、質の高さも求められます。

児童演劇などの提供者にはさまざまなレベルがあり、演技力や訓練が不足であったり、子どもの気持ちに添えない内容であったりするものもあるので、大人はしっかり子どものためによりものをつくり、また子どもとともに楽しむ場を工夫していくことが大事だと思います。

その意味でも親子で楽しめる子ども専用のホールの存在はなくしてほしくないと考えます。

また今後の課題として良質な舞台芸術を確保するため児童演劇に携わる人や劇団への支援もさらに必要だと思います。かつて児童会館では上演作の稽古

を子どもたちに公開することを前提にホールの使用料を減免するなど、経済基盤の弱いところが多い劇団への支援策を考えました。

子どもたちが高い料金を払わないでも、自分の意志で良質な文化にふれることのできるしくみをもっと充実させる必要があります。

いじめ、被虐待、人間関係が苦手な子どもなど、子どもの問題が取りざたされますが、よい文化財には子どものころを育て、ケアする力があると信じます。児童館や保育園、児童福祉施設などでせめて年1～2回はよい文化財を子どもたちに届けたい、そして思いっきり遊べる遊びの場の確保を望みたいものです。

参考文献

- ・2009年「児童福祉文化財年報 平成20年度」財団法人日本児童福祉協会
- ・片岡玲子 2007年 立正大学臨床心理学研究第5号「子どものころと児童福祉文化財」立正大学 心理臨床センター
- ・片岡玲子 植木信一ほか 2006年「児童福祉文化財の効果的な普及に関する調査研究」財団法人こども未来財団
- ・日本児童・青少年演劇劇団協同組合編 2009年「証言・児童演劇—子どもと走ったおとなたちの歴史—」晩成書房

キーワード：児童福祉文化財

児童に適切な文化財であって児童の健全育成に積極的な効果をもつもの、また児童福祉思想の普及に効果をもつものなどとされ、社会保障審議会福祉文化分科会で推薦される。児童図書、舞台芸術作品、映像・メディア作品などが対象となっている。

モノの氾濫の中、 失われゆくところ



詩人、子どもの文化研究所 所長、東京家政大学 名誉教授 **片岡 輝**
かたおか ひかる

時代と社会の変容と文化財

文化と文化財は、時代と社会の在り方に大きく影響される。子どもの文化と文化財もその例外ではないことを歴史は示している。一つの時代が終わり、新しい時代が始まった戦後60有余年をふり返ってみれば、子どもたち自身が創り、育み、伝えて来た文化と文化財、そして大人たちが子どもの成長発達に良かれと願って生み出し、与えてきた文化と文化財に、時代と社会の変容の光と影がくっきりと印されていることが分かる。

子どもを取り巻く環境である家庭、園、学校、地域、社会、自然、地球、宇宙のいずれもが、モータリゼーション、都市化と核家族化、技術革新による産業構造の変化、流通革命、ITによるグローバルゼーションなどの影響を受けて激しく変わり、その衝撃波が私たちのライフスタイル、消費行動、価値観、人間関係、子育て、教育、コミュニケーション、移手段などにおよび、子どもの心性をも大きく揺さぶるに至っている。

子どもにとって深刻なのは、自由に遊び、語らい、思索し、行動することができる空間と時間と仲間の、いわゆる三つの間が生活環境から奪われてしまったことである。その結果、仲間から受け継いできた鬼ごっこ、わらべ歌遊び、おままごと、まりつき、なわとびなどの活動的な集団遊びや、人形遊び、空想

遊び、読書などの静かな一人遊びといった多くの文化と、そこで使われてきた文化財がすでに失われ、あるいは、今も失われつつある。

大人が与えてきた文化や文化財にも、商業主義の跋扈による大きな変容が見られる。売り上げ至上ないしは、利益追求の経営方針により、どんなに優れた文化財であっても採算を無視することが許されなくなり、出版物、玩具などの分野で、悪貨が良貨を駆逐するかのような結果を招来しつつある。

変容は、子どもたちのライフスタイルにも及ぶ。両親の就労が生んだカギっ子、両親のいないリビングで1人で夕食を摂る個食、子ども部屋へひきこもってのテレビやゲーム、友達と一緒にいてもめいめいが携帯ゲーム機に熱中する、といったこれまでになかった現象が出現した。また、子どもたちの中には、両親と2組の祖父母のいわゆる6ポケットによって与えられる豊富なお小遣いや数々の商品に囲まれながら、ケータイやインターネットでバーチャル空間の見知らぬ友達と繋がるという生活によって、孤独感や愛情への飢餓感をかろうじて満たしている姿も見られ、総じて「ところ」の喪失が憂慮される。

さらに昨今は、失業による貧困家庭や、離婚による片親家庭の増加が育児放棄や虐待を誘発しており、文化や文化財に触れる機会すら奪われた子どもがいる事実も忘れてはなるまい。子どもが失ったの

は、三つの「間」にとどまらないのである。

この半世紀の子どもの文化の在り方を検証すると、あふれんばかりのモノに囲まれ、華やかさと豊かさに彩られているかのように見えて、実は、子どもの権利によって守られるべき固有の生活が地域・学校・家庭の管理社会化や親の経済状況によって劣化し、子ども同士間と大人との人間関係も希薄化して確実に悪い方へと流されているということが分かる。

遊ぶ子どもたちの戦後史という副題を持つ評論家堀切直人著の『原っぱが消えた』（晶文社・2009）の書き出しに〈子供たちは原っぱに足を踏み入れた途端に、自分たちの心を縛りつけていた拘束から解き放たれて、全身に活力があふれ、大地との一体感を味わいながら、夢中で遊び回った。原っぱは子供たちのアジール（避難所）であり、サンクチャリ（聖地）であった〉とある。アジールとサンクチャリを奪われ、追いつめられた子どもたちの窮状を、一昨年（平成20年）の小学生を含めた学生・生徒の自殺数972人（09年版自殺対策白書・政府）と、虐待を受けたと確認された子どもが8,108人に達した（全国児童相談所虐待調査）という二つの数字が象徴的に示している。

変容を表わすキーワード

この半世紀に文化と文化財に起こった変容を最も端的に表わすキーワードは、「アナログからデジタルへ」である。長針短針を持つアナログ型時計と、日めくり式に時間が表示されるデジタル時計の違いが示すように、アナログは線、デジタルは点に例えられよう。電氣的な情報の処理を線から点へ変換する技術によって、情報伝達のスピードと量が飛躍的に速まり、アナログテレビとデジタルテレビの映像の比較で明らかのように、情報量の増加が情報の質

を圧倒的に高めた。インターネットを介して運ばれる情報も、デジタル化によって高速、高質になり、瞬時に世界中を駆け巡ることになった。こうした高度情報化時代の到来は、情報のみならず私たちの生活、文化、価値観、行動様式など、あらゆる領域に変化をもたらしている。

子どもの文化の領域で見れば、遊び方、遊びで使うモノ、メディアの在り方と接触時間、遊び仲間、大人の関わり方、文化に触れる機会と環境などが大きく変わり、興味の対象、面白さの基準、接触態度、興味の持続時間、消費行動、文化に対する価値観などにも「アナログからデジタルへ」という変化が生じている。

変化のベクトルは、集団から個別へ、使いまわし（伝承）から使い捨て（消尽）へ、手作り（能動）からレディメイド（受動）へ、生活密着（リアル）から遊離（バーチャル）へ、人間相手から機械相手へ、双方向性から一方向性へ、大人の育成的な関わりから放任へ、精神主義から実利主義へ、地域型から広域型へ、不易から流行へ、こころからモノへ…と限りなく向かいつつある。

歴史は何を物語っているか

子どもの文化のこの半世紀の推移を、『子どもの文化戦後50年—21世紀につなぐ』（『子どもの文化』1995/7-8月特集号・子どもの文化研究所）所載の日本福祉大学教授小木美代子論文を参照しつつ振り返ってみよう。

小木は、子どもの戦後史を次の三つの時期に分け、それぞれの時期に子どもの周辺で起こった特徴的な出来事をあらまし次のように記している。

第一期 戦後の一連の民主的改革期とその後のテレビ放映の開始（1958）を経て、国産第一号のテレビアニメ「鉄腕アトム」の放映（1963）に至るまで

の約20年間。敗戦からしばらくの間、貧困と食糧難にあえぎながらも、民主的教育改革のもと、子どもたちは比較的のびのびと異年齢集団で日の暮れるまで遊んだ。ところが経済的な力がついてきた後半には、子どもとテレビの関係が問題となり、「テレビっ子」「カギっ子」といった新語が生まれ、遊びも2～3人のミニ集団による室内遊びに転化した。

第二期 「鉄腕アトム」放映からテレビゲーム機の発売までの19年間。子どもがテレビとCMのメインターゲットとなり、テレビ漬けやキャラクター・マニアが出現し、テレビと連動したマンガやキャラクター商品がブームとなった。こうした生活環境の変化の中で近視、虫歯、肥満児、成人病予備群が増え、これに危機感を抱いた親たちによるおやこ劇場・子ども劇場運動や子ども文庫運動が全国に広がっていった。学校教育は、高度成長経済を支える人材養成に走り、能力別偏差値教育から落ちこぼれた子どもたちは意欲を失い、三無、五無主義が蔓延した。

1973年には、第一次オイルショックがわが国を襲い、企業は苦境を脱するために合理化、コストダウン、技術開発などの体質改善とともに、内需拡大のため商品の付加価値化、差異化を図り、保育・教育産業、外食産業、家事代行など、家事の商品化が進んだ。また、家計を支えるための主婦層の就労が増え、子どもの非行、校内暴力、家庭内暴力、いじめなどの増大につながった。

第三期 テレビゲーム機が出現した1982年からこの論考が書かれた1995年までの13年間。ファミコン・ブームは、多くの時間を非現実の世界と向き合っただけで現実認識の弱い子どもや青年を生み、自殺、いじめ、殺人など、子どもや社会的弱者が事件の当事者にさせられ、あらゆる領域でボーダーレス化が進んだ。バブル経済が破綻し、生きる力やモ

ラルを喪失し、幼児化する子ども・青年が目立つようになったのを受けて、教育課程の改定が行われ、1992年9月から段階的に学校五日制(ゆとり教育)が導入され、同じころ、子どもの権利条約が批准され、発効した。

小木の論考は1995年で終わるが、その後の第四期に当たる今日までの15年間には、戦後50年の歴史の負の部分が受け継がれ、より強化されたような事件や現象が多発している。おやじ狩り、援助交際、不登校児が10万人に迫り5年前の3倍に、酒鬼薔薇事件、保健室登校一人に6年間で倍増、フリーター151万人超、授業が分からない子が半数超、むかつく・イライラする友達66%、親59%、子どものぜんそく・少年犯罪・児童虐待が増加、離婚29万件超、校内暴力3年ぶりに増加、池田小事件、長崎男児殺害事件、佐世保女児刺殺事件、寝屋川中央小に卒業生が侵入しての死傷事件、福岡小1殺人事件など子どもが被害者になる事件の続発、子どもの貧困・格差が問題化、西東京いこいの森公園騒音訴訟で裁判官が子どもの声は騒音と認定、赤ちゃんポストの設置…などが見られ、食品偽装事件、世界的な金融危機、秋葉原無差別殺人事件、派遣切りなどに象徴される大人の社会の混迷と連動して子どもの受難は深刻化し、生き難さはいっそう増している。

遊び・文化財関連を概観すると、プリクラブーム、ポケモンゲームソフト・NINTENDO64・たまごっち発売、モーニング娘結成、「もののけ姫」公開、遊戯王カードブーム、「だんご三兄弟」ヒット、「ハリーポッター」シリーズ刊行、高校生のケータイ所有30%、プレイステーション2発売、ユニバーサルスタジオJオープン、「千と千尋の物語」公開、ケータイ小説流行、まんが「ヒカルの碁」のヒットから子どもたちの間で碁がブーム、「声に出して読みたい日本語」ベストセラーに、カードゲームムシ

キング・オシャレ魔女ラブ&ベリー・泥だんごブーム、「世界に一つだけの花」大ヒット、PSP・任天堂DS・ドコモのキッズケータイ・任天堂Wii・プレイステーション3発売、「崖上のポニョ」大ヒット…などのほか、教育・生活関連では、女性の社会進出、共稼ぎ家庭の増大、未曾有の少子・高齢化、学力の低下などに対応すべく、保育所の入所基準の緩和、ファミリーセンターの設置、学童保育の法制化、キャリア教育推進、チャイルドシート義務化、少年法改正、国際こども図書館開設、子どもの読書推進法施行、総合学習・学校選択制・食育基本法・教育基本法・教育関連三法・放課後子どもプラン・脱ゆとり教育の学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針・次世代育成推進計画などの策定・改正・施行が行われ、子どもの生活と心性に大きな影響を与えると同時に、新たな変化をもたらそうとするシーズと、現状の歪を正して行こうという変革の確かな意思も秘められているように思える。

未来に希望はあるのか？

エレン・ケイが希望を託して「児童の世紀」と名付けた20世紀は、子どもの権利条約を生んだものの、必ずしも子どもたちにとっての輝かしい世紀にはなり得なかった。そのことは、戦後50年のふり回りからも明らかである。

児童学の本田和子は、『子ども100年のエポック——「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』（フレーベル館・2000）で、この100年の「子ども観」「子ども—大人関係」の変遷をたどりながら、大人による善意のゲッターに子どもが囲い込まれた100年であったという。

善意のゲッターの典型例は、「学校制度」で、「教育＝善であり価値である」という信念のもと、そのなかへと子どもたちを「収容」した。さらに、子ど

ものために用意された絵本・文学・演劇・童謡などの文化は、子ども専用のゲッターの拡大に結び付き、20世紀の後半のニューメディアによる情報化の波は、子ども向け漫画アニメなどの映像文化や、新しく参入したコンピュータ・ゲームの世界という新しく独自の「専用地」を作り出した。

子どもは市場原理に抱え込まれ、市場の標的となったとし、〈いま、私たちの20世紀は、未来に対して、それほど楽天的・向日的な希望を描き得てはいない〉としながらも、次のように未来への展望を述べている。

〈弱者をその「弱さ」において劣位に位置付け、優劣の序列化のもとで優者に「保護」の責任を課すのではなく、優劣という序列を解体した上で、弱者は一人前に生きるための「正当な権利」として特別な対処の仕方を要求する。障害を負うた人、あるいは高齢者が体現すべき「権利主体」としてのこうしたありようが、いま「子ども」にも求められているのではないか〉〈この世紀の英知は、「子どもの権利」というキーワードにより、それを実行することを核として、地球的規模で連帯する道を用意してくれた。20世紀が「子ども」の周辺に巻き起こした様々な動きのなかでも、次の世紀に向けて手渡さねばならぬ最大の遺産がここにあると言えないだろうか〉

2000年に本田が提起したこの展望の実現化に向けて動き出しているさまざまな取り組みの一つを紹介してみよう。

2010年10月に世界のおよそ190カ国・地域の代表が参加して名古屋市で開催されるCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)に合わせて、世界の子どもたち200人が生き物の大切さや環境問題を話し合う「子どもCOP10」を開き、子どもたち自身が大人や未来へ向けての「約束」をとりまとめて、本会議場で宣言する計画が進んでいる。

時代と社会は移り変わっても、子どもたちが内に秘めている「生きようとする力」であるセンス・オブ・ワンダー、正義感、好奇心、冒険心、学ぶ力は、まだ失われてはいない。その力がある限り、子どもの文化と文化財も子どもたち自身の力によって不死鳥のごとくに甦るに違いない。

キーワード：子どもの権利条約

前文と54の条文からなり、子ども権利と国や親の義務が規定されている。文化と文化財に関連する条項は、前文、6,12,13,17,27,28,29,31の8カ条にわたり、31条には、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める、と規定されている。

参考資料／戦前・戦中の子どもの文化と文化財の概要

原昌・片岡輝編著『児童文化』（建帛社・2008第2版）、上田融編「児童文化関連年表」より筆者が構成した。

明治・大正

- ・政治・経済・教育・生活などのあらゆる領域での近代化が進み、学制が公布され、国民皆学となる。
- ・子どもを対象とした出版・玩具・音楽などの文化財が盛んに作られ、伝承遊びに加え、近代化に伴う新しい遊びが續々生まれる。
- ・アンデルセンなど、世界の文学・絵本・演劇・音楽・遊びが紹介される。
- ・巖谷小波・久留島武彦・小川未明・鈴木三重吉・吉屋信子・野上弥生子・浜田広助・坪田譲治・北原白秋・野口雨情・島本赤彦・山村暮鳥・山田耕筰・樺島勝一・宮尾しげおなどの作家・詩人・作曲家・画家が子ども向けの作品を競って発表。
- ・倉橋惣三らによる児童遊戯指導・児童文化運動・坪内逍遙指導の児童劇公演・学校劇が盛んになる。
- ・ベーゴマ・コリントゲーム・野球盤・活動写真玩具・空気鉄砲・ゴムボール・セルロイド玩具・ぜんまい仕掛け玩具・電池使用玩具・幼少年少女雑誌・レコード・ラジオ放送など新しい文化財が登場、遊びもライフスタイルも多様化した。

昭和・戦前

- ・宮沢賢治「オッセルと象」・佐藤紅緑「ああ玉杯に花うけて」・フェアブル「昆虫記」・アルス「日本児童文庫」・幼年倶楽部・キンダーブック・ルパン全集・赤い鳥童謡集・田川水泡「のらくろ二等兵」・新美南吉「ごん狐」・島田啓三「冒険タン吉」・武井武雄「赤ノッポ青ノッポ」・坂本牙城「タンクタンクロー」・「日本少国民文庫」・江戸川乱歩「怪人二十面相」・宮沢賢治「風の又三郎」・横山隆一「フクちゃん」・ミルン「熊のプーさん」・下村湖人「次郎物語」などが発刊された。
- ・日中戦争・第二次世界大戦突入により、生活綴方、生活教育、教育紙芝居などの文化運動の高まりも抑えられ、検閲の強化・自由主義的な文化の弾圧と併行して、愛国子どもかるた・愛国百人一首・「海ゆかば」の国民歌指定・戦意高揚のアニメ映画「桃太郎の海鷲」「フクちゃんの潜水艦」の制作…と、子どもの文化の戦時色と統制が強まった。
- ・遊びでも、三勇士ごっこ・メンコ・ビー玉・ベーゴマ・水雷艦長・けん玉・ダイヤモンドゲーム・チャンバラごっこ・戦争ごっこ…と戦争の影が忍び寄る。
- ・海洋少年団結成・小学生に武道教育導入・国定教科書改訂・小学校を国民学校、小学生を少国民に改称・戦時訓練・防空壕づくり・学徒動員・学童疎開…と子どもの生活も戦時色に染まった。

さまざまな領域の子ども文化財

子どもと絵本

—絵本と子育て・親育ち—



たけさきこゆうこ
安曇野ちひろ美術館 副館長 竹迫祐子

■はじめに

絵本は、“人がはじめて出会う美術であり文学”であり、同時に“0歳から100歳までの人が楽しめる文化財”と、私たち、ちひろ美術館は考えている。

絵本と言えば、“子どものもの”というイメージがしっかりと定着しているし、辞書を引けば、「絵を主にした子供向きの本」とあるから、“0歳から100歳まで”と聞いて、怪訝な顔をする人も多かもしれない。確かに、絵本は子どもにとって、重要な文化財のひとつだが、この「子どものもの」という認識に、少々、引っ掛かりを感じなくもない。世に「子供騙し」という言葉があるが、子どものためのもの、子ども用のものと言えば、大人のそれと違って一段も二段もレベルが低いものでよとする風潮が、未だに存在するからである。「子供騙し」とは、「子供をだますように単純で幼稚な事。相手をばかにしたような方法」(大辞泉)ということになるが、真に優れた文化財としての絵本がそれでは困る。

世界を代表するアメリカの絵本作家、絵本『かいじゅうたちのいるところ』で知られるモーリス・センダックは、作り手の立場から、「みんなは普通、絵本というと、ごく小さい子どもに読んでやるための絵のたくさんはいったやさしい本と考えがちですが、決してそれだけではありません。私にとっては、

これは徹底した意識の集中と制御とを要する複雑な形式の詩にそっくりな、おそろしくむずかしいものです」と語っている。

幼い時期にこそ、良質の文化に出会い楽しむことは、人間形成にとって重要である。その考え方は、今日次第に広がってきた。良質の絵本が、幼い子どもの心を捉えると同時に、成熟した大人にとっても人生の折々に意味を持ち得ることが、盛んに語られるようになってきた。絵本は大人の心を動かし得るし、大人を唸らせる絵本だからこそ、子どもを満足させることができる。そこに、「子供騙し」はない。

ここでは、そうした前提にたって、絵本と子どもの関係を考えていきたい。

■「絵本」とは

「絵本」は広義には、“絵入り本”(=絵が入った本)の総称であり、古くは絵巻物から江戸時代の絵草子を含めて規定される。一方、狭義には、近代以降の児童観の確立と重なって、文字の読めない幼い世代を主たる読者対象とした子どもの本の一ジャンルという考え方が一般的である。

日本で、子どもの本の一ジャンルとして絵本を捉える考え方は、20世紀初頭に一般的となり、第二次世界大戦以降定着した。戦後、日本の絵本は飛躍

的な発展を遂げる。その背景には、戦後の教育運動、児童文化運動との関連が大きい。二度と戦争をくり返さない、子どもを戦場に送らないという決意が、子どものための教育や文化を育てる原動力となり、昂揚する気運の中で絵本も発展してきた。

そうした歴史からも、日本における絵本研究は、長年、主として教育、さらには児童文学の一分野として取り組まれることが多かった。それが、近年、次第に変化してきている。1997年に創設された絵本学会は、設立趣意に、「絵本学とも呼ぶべき」絵本の「表現の位相を把握し解明していくための研究」が期待され、そのために「従来の絵本領域の枠組みを越えた、造形学、美学、美術史、哲学、記号学、論理学、教育学、言語学、心理学、文化人類学などの諸科学、また、デザイン、絵画、映画、演劇、文学、漫画その他様々な分野の専門家相互の協力による情報交換、共同研究」が望まれると謳っている。

絵本の専門美術館の立場からは、“美術として絵本の表現”“絵を視野に入れた受容論(読者論)”という視点で絵本研究が深まることに期待している。

■ 絵本の「絵」

絵本の構成要素は、「絵」「言葉(テキスト)」「ストーリー」あるいは「テーマ」であるが、同時に、本という「造形」としての性格も合わせ持っている。絵本とは、“絵と言葉とで、ストーリー(テーマ)を語る造形”という総合芸術と言える。

言うまでもなく、絵本という存在を決定付けているのは、「絵」である。所謂、挿絵とは異なり、絵本の絵はそれ自体がストーリーを展開し、登場人物の性格や動き、内面等を物語る力を持っている。絵とテキストは、それぞれが自立しながら、お互いを補い合い調和を図っている。このことを、先のセンダックはわかりやすく次のように語っている。「テ

キストと絵とのあいだにどうバランスをとるかということが、その本を作っていく上でのむずかしさとなり、緊張とも喜びともなるわけです。決しておなじことをするわけにはいきません。文章で書いたことを、その通り絵にはしてはいけないのです。テキストには絵が働くことのできる余地を残しておかなくてはなりません。文章で書いたことを、その通り絵にはしてはいけないのです。そして、絵がひと働きしたら、もう一度言葉にもどります。そうすれば、今度は絵に拍子を取ってもらって、言葉が力を尽すことができるわけです。」こうして創造される絵本は、幼い読者、とりわけ、言葉を獲得する前の段階の子どもたちにとって、大きな役割は担う。

長年、幼児心理学の領域から絵本と子どもの関係に取り組んできた佐々木宏子は、「絵本が『絵で語る』という特徴を生かして、思考が言葉によって未だ支配されない幼い子どもの心を描いてきた」ことは歴史的な事実であり、「絵本が持つ本質のひとつ」である。言い換えれば、絵本の作家や画家は、読者が幼い子どもであるなら、必然的にテーマとして彼ら自身の幼年時代、「とりわけそのなかでも印象深いエピソード」を描いてきた。「それら数々の想起されたエピソードは、それが優れた芸術的資質を持つ画家の手になると、言語で表現することは難しい幼い子どもの非論理(論理)や感情の世界を、ありのままに近い形で絵にすることができます」と解説する。だからこそ、幼い子どもたちはやすやすと絵本の世界に入り、感じ、楽しみ、共感することができる。

■ 文化財としての絵本の特異性

ところで、絵本は、それ自体が豊かで魅力的な文化財であるが、文字を読むことのできない幼い子どもにとっては、大人(もしくは文字が読める年長者)

の介在なしには、成り立たない特異な文化財でもある。これは、音楽に近いと言えるかもしれない。音楽は、作曲家が作った曲と職人が創造した楽器とで作られるものだが、すばらしい曲と美しい音色を奏でうる楽器があったとしても、それを演奏する演奏者がいなければ、聴衆には届かない。

適切な介在者が存在することで、自分で文字が読める段階以前の子ども、さらには、言語を獲得する以前の子どもにとっても、絵本は楽しさを共有でき、文化財としての機能を持ちうることになる。

■ 絵本の魅力

例えば、『いないいないばあ』（松谷みよこ・文瀬川康男・絵 童心社）は、初版から40年以上を経た今日まで400万部以上が刊行され、今も愛され続けている絵本である。長い命を持った絵本でありえている理由は、「ことばのリズム」「繰り返しとそのリズム」そして、「絵の魅力（画面展開の意外性）」の三者が絶妙に調和していることに他ならない。

「にゃあにゃが ほらほら いないいない」で、いないいないと顔を隠したネコが描かれ、頁をめくった瞬間に、「ばあ」ということばとともに、顔から手を離れたネコの場面になる。その後、「くまちゃんが ほらね・・・」「こんこんぎつねも・・・」と繰り返され、最後はのんちゃんという女の子で終わる。極めてシンプルな内容の繰り返しではあるが、こなれた言葉の親しみやすさ、語りやすさ、覚えやすさが、読み手も聴き手も、大層すんなりと絵本の世界へ誘ってくれる見事な絵本である。

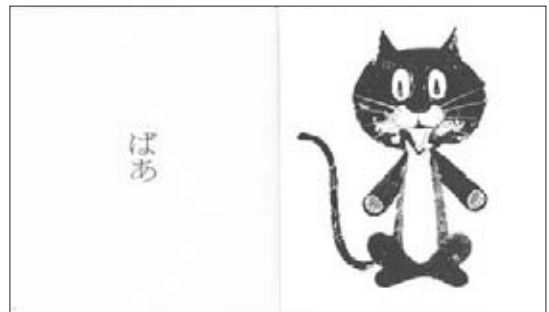
幼い読者の心を捉える絵本では、「繰り返し」という方法がよく用いられるが、その力は大きい。「繰り返し」は、ものごとを認識し理解する力がまだ十分ではない幼い子どもにとっては、幼い（拙い）理解や認識を助け、読者に安心感を与える。さらに



「いないいないばあ」



「にゃあにゃが ほらほら いない いない……」



ページをめくると「ばあ」

次なる展開への予測、次に何がおこるかを想像させることに繋がり、その予測が共に絵本を読み合う人との共感をもたらす。ただし、「繰り返し」の終わりは、同じ繰り返しではいけない。繰り返し＝予測を超える然るべき帰着が必要である。

さらにこの絵本の絵について付け加えるなら、それは渋い色調で、大人にとっても魅力的である。旧来、絵本の絵は“シンプルで、明確な線と明るい色

彩でなければ、幼い子どもは理解ができない”と語られてきたが、この絵本はそうした概念から逸脱している。ということは、子どもが理解でき好きだと感じる絵は、それほど狭くはないということであろう。

■子どもと絵本

前述の佐々木は、子どもが絵本を読んでもらうということは、「ほかの遊びのように手足を自由に使って、直接に物や人に働きかけるのではなく、基本的に頭の中でのみ集中的に遂行される心理・意識レベルの活動」で、「その絵本のテーマがどうであれ、心理機能の面からいえば、大変高度な認識活動」であって、それは、「感覚・知覚・記憶・表象・言葉などを使って絵と文を読み取る人間以外の動物にはない優れた活動」だとしている。つまり、子どもは、絵本を楽しむために、持てる能力を駆使しなければならない。総じて、極幼いころから絵本を読んでもらう経験を多く積んでいる子どもの方が、幼児期になってより深く絵本を楽しむ傾向が強いのは、そうした経験の量に関係すると言えよう。

同時に、絵本を読んでもらうこと自体が、楽しいものでなければ成長の糧にはならない。それは読んでもらった時間や冊数とは比例しない。佐々木は、「子どもが絵本を読んでもらって楽しむためには、何よりも読み手の大人との間に基本的な信頼関係ができあがっていなければなりません。笑顔を通しての交流、肌の触れ合いを通しての交流、意味がわからなくてもやさしい人の声への集中は、いずれも子どもが絵本を楽しむための前提条件」と指摘する。

■子育てと絵本 親育ちと絵本

昨今、絵本に関わる活動は目を見張るほど活発になり、子どもが絵本と出会う機会は徐々に増えてき

ている。子どもに絵本を繋ぐ介在者も、母親だけでなく、父親や祖父母、兄姉、保育園や幼稚園や学校の先生、図書館の司書、読み聞かせボランティア等々、様々な存在が見られるようになってきた。絵本選びや読み方についても、近年では、多様な機会に学ぶチャンスが生まれてきた。例えば、地域の保健センターで行われる乳児健診の機会などに、赤ちゃんと一緒に絵本を楽しむ活動も盛んに行われるようになってきている。NPO法人ブックスタートの調査によると、同法人が関わるだけでも、全国1795市町村中725自治体がブックスタートに取り組んでいる。当館も絵本を提供し、地元の保健センターと提携して、赤ちゃん和絵本の出会いの活動に取り組んでいるが、小さい頃から自分自身が絵本と親しんできたお母さんだけでなく、むしろ、そうした経験の少ない人が、絵本を読んでもらうわが子の姿、変化を目の当たりにして、絵本に開眼するケースは少なくない。館内の図書室では、日ごろ絵本を読む機会がほとんどないようなお父さんが、子どもにせがまれてたどどしく読みはじめ、何冊も読み続ける姿も目にする。絵本を読み合う中で、子どもも大人も互いの表情や声の調子、反応を感じあいながら、特有の時間を過ごしていることがわかる。確かに、絵本体験は子育てであると同時に、親育ちにも繋がっている。「読み手の大人との間に基本的な信頼関係」の構築と、「笑顔を通しての交流、肌の触れ合いを通しての交流」は、こうした時間の中から生まれる。

■おわりに

「子どもたちがごく幼いうちからすでに自分を引き裂く感情とはお馴染み」で、「恐怖と不安は彼らの日常生活の本質的な一部」であり、「彼らは常に全力を尽して欲求不満と戦っている」。そして、「子



安曇野ちひろ美術館内で絵本を読む親子

撮影 橋本裕貴

子どもがそれらから解放されるのは、ファンタジー空想によってなのです」と、センダックは自らの幼少体験と青年時代の子どもの観察から記している。その意味で、空想は子どもが成長する上では不可欠の行為と言える。絵本は、映画やアニメーションと同様に、空想の世界を実際に見せる力を持つが、「人生を偽りなく反映すること—ファンタジー空想の人生においても、現実の人生においても—は、あらゆる偉大な芸術の基礎です」とも、センダックは語る。

たとえ幼い時期であったとしても、空想は現実からの逃場ではないということであろう。現実の困難に立ち向かうとき、子どもはいつとき空想の世界に避難することはしても、それはあくまでも「いつとき避難所」であって、永久にそこに踏みとどまることはできないし、とどまらせてはいけない。

絵本という文化・文化財に関わる時にも、「人生を偽りなく反映することは、あらゆる偉大な芸術の基礎」という言葉は、ファンタジー・ブームと言われる今日、極めて大きな意味をもっている。

経済優先の世の中で、近頃、盛んに「費用対効果」

に求められるが、文化が果実をもたらすまでの時間は長い。赤ちゃんのときに読んでもらった絵本の記憶が蘇るのは、その人が成長し結婚し親になったときかも知れない。つまり、20年から30年のサイクルで、絵本が人の内側に作用することだってある。“文化を育てる”“文化財を守る”という営みは、そんな長いスパンで考えられなければなるまい。1000円の絵本の効果は、20年後30年後の未来に、対価を大きく超えて戻ってくる。また、そんな魅力的で息の長い絵本の創造こそが、今求められている。

参考文献、他

- ・河合隼雄、松居直、柳田邦男/著 2001年
「絵本の力」 岩波書店
- ・セルマ・G・レインズ/著 渡辺茂男/訳 1982年
「センダックの世界」 岩波書店
- ・モーリス・センダック/著 脇明子、島多代/訳 1990年
「センダックの絵本論」 岩波書店
- ・佐々木宏子/著 1993年
「新版 絵本と子どものこころ 豊かな個性を育てる」
JULA出版局
- ・佐々木宏子/著 2000年
「絵本の心理学 子どもの心を理解するために」 新曜社
- ・佐々木宏子/著 2006年
「絵本は赤ちゃんから 母子の読み合いがひらく世界」
新曜社
- ・田丸尚美/著 2007年
「臨床発達心理実践研究2007第2巻117-122 乳児検診での
絵本体験に見る親子の関わり」
- ・2007年 「絵本学会の10年」 絵本学会
- ・絵本学会 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/>
- ・特定非営利活動法人ブックスタート www.bookstart.net

キーワード：ブックスタート

1992年、イギリスのバーニンガムで始まった、赤ちゃんに本との出会いを作る運動。「絵本」を介して、親が赤ちゃんに向かい合い、語りかける時を持つことを応援する運動。日本では、2000年の「子ども読書年」をきっかけに取り組みははじまった。現在、特定非営利活動法人ブックスタート等を中心に、全国の市区町村自治体の活動として、0歳児健診等で実施されている。

さまざまな領域の子ども文化財

映画文化と子どもたち

—映画を観ることは別の人生を観ること—



すずき かずみつ

(財) 児童健全育成推進財団

鈴木一光

ワーグナーとポニョ

のったりとした海。陽が燦々と輝き、おもちゃのような貨物船が行き交う。その海の中ではクラゲが漂い、さらに深海には触手の生えたような潜水艇の舳先にクラゲを増殖している男がいる。

宮崎駿監督が「アンデルセンの『人魚姫』を今日の日本を舞台にキリスト教色を払拭、幼い子ども達の愛と冒険を描く…」と平成20年に制作したアニメ映画『崖の上のポニョ』の冒頭である。

家出した魚の子ポニョは、ガラス瓶にはまって浜に打ち上げられるが、海辺の崖の上に住む5歳の宗介に助けられる。ガラスで指にケガをした宗介の傷をポニョは舐めて癒す。人間の血を舐めた人面魚は半魚人となる。ポニョを気遣う宗介と、宗介をすっかり気に入ったポニョ。父(ポニョの母と結婚した元人間)に連れ戻され眠らされたポニョは、妹達の力を借りて父の魔法を盗み出し「宗介んとこイクー」と一目散。危険な命の水がまき散らされた海の世界は大混乱。大津波は宗介たちの町を丸呑みにする。ポニョの宗介への想いが爆発し、一気に海底から海上に躍り出て波の上をひた走るシーンの高揚感は何とも爽快である。バックに高鳴る音楽(久石譲)は「ポニョの飛行」。モチーフはまさにワーグナー「ワルキューレの騎行」。そう言えばポニョの本名はブリュンヒルデ。神々の長ヴォータン(魔

法で娘を眠らせる)の9人の娘達と同名である。楽劇『ニーベルングの指輪』の世界観は終末を迎える神々の世界が舞台であり、ヴォータンと海の秩序を守ろうとするポニョの父の姿がダブる。



ポニョの一念

宮崎監督は、「…海を背景ではなく主要な登場人物としてアニメートする。少年と少女、愛と責任、海と生命、これ等初源に属するものをためらわず描いて、神経症と不安の時代に立ち向かおうというものである」と企画意図を結んでいる。

海を登場人物としてアニメートするとは、どういふことだろう。波を水魚という巨大な魚のように描くという表現上の問題に留まるはずはない。「初源に属するものを…」という言葉と重ね合わせると、古代人の自然観を導入するという意味ではないだろ



うか。

文化人類学者フレイザーによれば、太古の人々は自然と超自然の区別を理解していないという。山や海、太陽や風雨は自分と同じように命があり、衝動や動機によって行動する人的な存在、自分同様に希望や恐怖に訴えれば心動かされる存在とみなしていた。いわゆるアニミズム信仰である。だから、祈祷や威嚇によって、天候の恵と豊富な穀物を神々から得ることができると考えていた。その責任者に選ばれた者が、祭司にして王であり人間神となる。ポニョの棲む海の世界も、その神々の黄昏の時代である。

実は科学的現代を生きていると自負している私たちも、古代人の感覚を内包しているのではないか。怪談話やゲン担ぎ、開運グッズから「オーラの泉」等々と超自然は大人気だ。フロイトに始まる精神分析学は、その臨床経験を基に文化遺産の中から既成の物語を活用することで、人生の問題の本質を議論できるとした。これらの中の悲劇的物語が、患者の悲劇的体験を映し出すからである。

神経症と不安の時代に立ち向かうために宮崎監督は、自分の気持ちをてらいなく現わすこと。ポニョの一念岩をも通す、がむしゃらも必要だと…。

見^{かしこ}み^て逃げず

動物が人間に化けて嫁にくるが、正体が明かされ

て去るという異類婚説話がある。鶴の恩返しや蛇女房が有名だが、ヒロインたちは優しい女性の生産性(国生み・織物)と、傷つきやすい動物や死という二面性をもっている。ポニョもこの話だ。

さて問題は、なぜ彼女たちはそこまで献身的に尽くすのかということである。精神科医北山修は、その内奥は、人間社会で生きることの困難を感じて過剰適応しており「本当の自分」が露呈してしまうことへの不安、その時は社会から退去しなければならないという深刻な結末を予想しているからだと解釈する。それは精神を病む患者たちの臨床場面と共通するという。そして、同様の範疇の話を「見るなの禁止」とよぶ。さらにそこでの疑問は、見るなの約束を破った男性はなぜ罰せられないのか、または強く反省もしないのか—。

古事記の上巻に、イザナギが黄泉の国にイザナミを迎えに行くくだりがある。イザナミの「みないでくれ」という禁を破り、その腐乱死体を見てイザナギは「見^{かしこ}み^て逃げ^まし^き」となる。この時「見^{かしこ}み^て逃げ^まず」という責任の取り方が男性側にあれば、現実を露呈した女性の恥は軽減されるのではないかと北山は言う。

宗介は、ポニョの実態を知って逃げない。これが「愛と責任」ということであろう。グランマーレ(ポニョの母)がいう「ポニョの正体が半魚人でも

いいですか?」。うなづく宗介。ここが圧巻。なんてたって、まだ神の領域にいる5歳の宗介なのである。しかし私たちは幼児二人に、人を愛するとは、良い所だけじゃなく欠点も「丸抱え」することであると教わる。

映画館は学校

私は子どもの頃、夜ごと映画を見歩いていた。その時代は地方都市でも映画館が7館あり、一週間ごとに新作に変わったので、ちょうど具合がよかった。テレビの普及が200万台を超えたのが昭和34年、私の小学校の終わりだから、西岸良平・作『ALWAYS 三丁目の夕日』のその頃の話である。

当時、映画は娯楽の王者だった。とびきり映画好きの父は、仕事帰りに映画館で家族と待ち合わせた。父は仕事の都合で途中入場が間々あり、そんな時はそれまでの粗筋を耳元で説明するのが私の役目だった。今考えれば、それは手短かに要点をまとめる訓練になった。「笛吹童子」の歌を口ずさみ、「ターザン」の樹上生活に憧れ、「キングコング」に共感し、「鞍馬天狗」や「旗本退屈男」になって正義の刃を振った。映画はタイムマシンの仮想立体世界。私は心を解放し深く楽しんだ。

映画が跳ねると、どこが面白かったか言い合いながら家路をたどる。大切なことは、両親の愛情を信じられたこと。大人になってふり返ってみれば、一緒に興じてくれた両親と情緒を共有していたことが一番だったかもしれない。

長じて親になった時、娘たちにも味あわせてたくて映画館に通った。スピルバーグ監督『E.T.』を観た時、2歳の次女は「E.T.ってベタベタして触ったら気持ち悪そう」と大声で言い、4歳の長女はラストで大泣きだった。

映画は観察学習

「子ども文化」といっても、人類の精神的所産(学問・思想・芸術等)としての文化一般と遊離した特別な文化があるわけではなくて、その中の子どもに関連深いものが「子ども文化」であろう。それを物質化した文化財を活用して、児童館等の児童福祉施設では子どもの健全な成長・発達に役立てている。

とりわけ映像は、文学と音楽と美術(写真・絵画)の三位一体の近代集合総合芸術である。一瞬のうちに、本当の現実よりリアルに物事が脳裏に刻まれる。伝説の誕生に立合うから、激しく感情移入して説得力をもつ。

だから、良い映画を観ると豊かな人間になれる。その理由を以下にまとめてみた。

(1) 映画は人生のシミュレーション

人間というのは、一人について人生は一つしかない。映画を観るということは「いくつもの人生を見る」ということになる。ロン・ハワード監督は『アポロ13』で、100回の練習上の失敗が1回の生還に役立つことを描いた。幸福な人生、不幸な巡り合わせ、その分かれ目の多くは対人関係と運・不運。映画は、子どもの時から多様な生き方の見本市。人生のシミュレーションになる。

この効果は、文学も演劇も漫画も同様である。テレビはドキュメンタリーに適切なメディアだ。

(2) 映画は情緒の共有

映画は実際の人間が現れて、ローマ時代や宇宙都市などの街並みや、山や森のパノラマ的風景、そして時代の風俗の中で活動する。丁髷や辮髪、古今東西の冠婚葬祭の立居振舞など、百聞は一見にしかず。主人公と同じ場の空気に身をおくため、隣の人の人生を眼前に見ているような体験をする。

しかし、文学表現では百万語を費やしてもチャップリンの表情や、モンローのコケテッシュさは伝わらない。舞台ではヒロインが



ペンダントに秘めた写真を観客には見せられないのでセリフが命。漫画は映画に近いものだが音響効果は使えない。



(3) 映画館は映画に酔いやすい

できれば映画は映画館で観たい。友にも女にも裏切られた男が敵意と銃弾の中で孤高を貫くという映画を、庭には竜胆の花が咲き暖かい電気が灯るお茶の間で家族に囲まれてテレビで観た場合、どこまで主人公の気持ちに入れるだろうか。家具もなくカーテンもなく、街の灯りが窓から射し込むだけの高層マンションのフロアで足を抱える女…水道の水滴だけがポツーンと響くという場面で、テレビの音量を大きくしたら水滴音を演出した監督の意図は飛ぶ。加えていきなりCMに切り替わったら感情は切られる。見ず知らずの但し良質な観客は、孤独を演出する映画の一部なのである。また、他者の鑑賞を妨げないという場にふさわしいモラルが身に着く。

(4) 映画を観ると知識が広がる

映画を観てパンフレットを買う。制作意図や解説やスタッフの経歴や専門性を知る。原作があるものは漫画も含めて読んでみる。テーマに興味を持って調べることが本物の勉強であろう。ますます周辺領域への興味・関心が深まる。

前述のポニョなどは、映画を観て、制作意図を読むと、文化人類学、精神分析学との関連が思い浮か

ぶ。子どもと古代人と統合失調症患者はアニミズムの世界に生きている、といわれている。環境に有情性を感じる心理をもっているということである。加えて、映像技術のフォトジェニック論は、人間のその心性を利用するものである。

例えば、王子の誕生という場面で、燦々と輝く太陽や優しく揺れる林を映すことで、森羅万象が祝福しているという概念が表現される。雷鳴に不安や恐怖や破壊を象徴させる。剣をクローズアップすれば、正義の守護、邪悪な破壊、鋭利、殺戮などを暗示することができる。メイキング映像なども観れば、制作過程から裏話、映像技法、映像文法などにも精通することができて、映画はもとより、文化全般を深く味わえる資質を培う。

(5) 映画を観るとセンスがよくなる

映画は総合芸術であるから、主人公の職種、個性にしたがってセリフ、室内装飾、ファッション、持ち物、自動車の種類や色にはじまり、立居振舞、挙措動作など練り上げられている。いろいろな人のさまざまな人生をいくつも観て、容姿に憧れながら、ジェームス・ボンドはかけ離れているが、寅さんは近いというように、いつしか自己受容し自分なりのお洒落なセンスやユーモアに富む会話術などが磨かれるようになる。それが教養である。

映画は人師との出会い

映画を観るのはあくまで娯楽であり遊びである。特別に勉強しようと思う必要はない。だが、映画のテーマは人間が何に苦悩しどう生きたかであり、まさに人間学部の授業を楽しく見せられるようなものである。しかも格好いい主人公に同一化したくなると、その形を真似たくなる。まさに内発的動機づけの成立である。好きなものを探求することに努力は

いらない。それが遊びの効力である。

昭和29年、黒澤明監督『七人の侍』は野武士に襲撃される村を救うボランティアの話である。「赤穂浪士」も「勤王の志士」もあるべき志を示そうとしたボランティアだと私は思う。『スーパーマン』も『バットマン』もボランティアの映画である。『七人の侍』は腹一杯めしが食える条件なので有償ボランティアの話かもしれない。また、同時に初対面の七人が葛藤しながら目的を達成するというグループワークの話でもある。

ジョージ・ルーカス監督『スター・ウォーズ』は子育てにおける父親の役割がテーマである。銀河共和国を守るジェダイ騎士は自分の後継者パダワンを育成する義務を負う。それに失敗してダークサイドに墮としてしまう話である。現代の父親もその傾向ありだ。職場で後進指導には心砕くが、肝心のわが子に「父子相伝の技」を伝えていない。

山田洋次監督『男はつらいよ』はカウンセラー物語である。惚れたマドンナは悩みを抱えている。学なし、金なし、力なし、故に真摯に聴くことしかできない寅が、瓢箪から駒の葛藤解決に導く。クライアントが立ち直った時、カウンセラーは捨てられる。セオリー通りの映画なのである。



『ゴジラ』は原水爆禁止の話だし、『座頭市』は視覚障害者、『子連れ狼』は父子家庭、『夏の庭』は異年齢交流、『失われた週末』はアルコール中毒、

『黄金の腕』は麻薬中毒、『ターミネーター』は子育て支援者、『フランケンシュタイン』は被虐待児が犯罪者になるという話である。

映画は人間がテーマであり、楽しく、気が付けば人間の有様を学べる文化財なのである。

〔イラスト〕 鈴屋あやめ—漫画家、
『いったりきたり(1~3巻)』他(講談社)

参考文献

- (1) 映画パンフレット 2008年『崖上のポニョ』東宝(株)出版
- (2) ジェイムス・G. フレイザー 2003年『初版金枝篇』ちくま学芸文庫
- (3) 北山修 1993年『日本語臨床の深層 見るなの禁止』岩崎学術出版社
- (4) 佐藤忠男 1974年『映画の読みかた』じゃこめてい出版
- (5) ロラン・バルト 2005年『映像の修辞学』ちくま学芸文庫
- (6) 小川博久 2001年『「遊び」の探求』生活ジャーナル

引用映画等

- (1) 宮崎 駿監督 2008年『崖上のポニョ』日本・スタジオジブリ等
- (2) ショルティ指揮/ウィーンPo、1958~65年『ニーベルングの指輪』ロンドン
- (3) 山崎 貴監督/西岸良平作 2005年『ALWAYS 三丁目の夕日』日本・制作委員会
- (4) スティーブン・スピルバーグ監督 1982年『E.T.』米・ユニバーサル映画
- (5) ロン・ハワード監督 1995年『アポロ13号』米・ユニバーサル映画
- (6) 黒澤 明監督 1954年『七人の侍』日本・東宝株式会社
- (7) ジョージ・ルーカス監督 1978~2005年『スター・ウォーズ』米・20世紀フォックス
- (8) 山田洋次監督 1969~97年『男はつらいよ』日本・松竹株式会社

キーワード：観察学習

言語をもたない霊長類が文化を伝承していく仕組みは、長期間にわたる共同生活の中で年長の大人(成熟者)がモデルになって、子ども(未熟者)がこれに関心を寄せて見てまねるといふ、観察による学習が成立していたからであろう。

異年齢の遊び集団が自然発生的に成立しにくい現代にあって、みそっかすが年長児を観察する機会がなくなった。教授学習方式のみでは生きる意欲が薄くなる。憧れて見習うという学習意欲を培えるのが「映画」であり、「映画」は内発的動機に裏打ちされた集中力を養う遊びである。

さまざまな領域の子ども文化財

子どもと舞台芸術

—子どもに媚びない「子供のためのシェイクスピア」



やまさきせいすけ
演出家 山崎清介

一口に舞台芸術と言っても、古くは能・狂言、歌舞伎などの古典芸能、落語、漫才といった演芸の世界、オペラ、バレエ、前衛的なコンテンポラリーダンス、クラシックコンサート、ミュージシャンのライブ活動に至るまで、そのジャンルは数多くあります。その様々な表現形式に共通する部分は、観客を前にして表現する、俗に言う「生の舞台」です。これは演ずる側と観る側がひとつの空間を共有するパフォーマンスであると言えます。その中で、私は演劇を仕事としています。劇場の舞台でおこなわれる「芝居」「劇」と呼ばれているジャンルです。

私は1957年生まれで、幼い頃、家庭にはテレビが普及し始めていました。演劇を初めて観たのは小学3年の頃、学内の講堂で公演した『よだかの星』という児童劇団の芝居で、その印象は「こういう仕事をする大人って大変だな」というものでした。芝居の中味にはほとんど興味がなかったことを覚えています。もっぱら興味があったのはテレビの番組であり、中学、高校の学校行事での映画鑑賞はあったものの、演劇鑑賞は皆無でした。

私が演出・出演している「子供のためのシェイクスピア」は、1994年グローブ座にて企画から参加し、翌95年からスタートしました。初年度は花組芝居の座長、加納幸和氏が演出、96年から私が演出を担当して、2009年で15年目を迎えました。子

どもにシェイクスピアの芝居を観てもらおうというこの企画は、児童演劇を専門としていない私にとってかなりハードルの高い未知の世界でした。初年度の演目は『ロミオとジュリエット』。この公演にジュリエットの乳母役で参加した私は、大人が観客の時には考えもしなかった思いが頭をめぐります。私が乳母？男が乳母を演じることを子どもたちはどう思うのか？という素朴な疑問です。大人たちは男が女役を演じることを演劇の了解事と受け取ります。でも子どもたちはどうなのだろう？「あなたは乳母じゃない、だって男だから」と言われればその通りなのです。ですが、子どもたちを前にして私の心配事は杞憂でした。子どもたちの想像力は十分に鍛えられていると感じたのです。子どもたちは男が乳母役を演じていることを百も承知で、舞台上で展開していく物語に目を向け、自分たちの想像力を駆使して芝居に集中する姿がそこにはありました。私は子どもたちがどのようにして絵本を読み、または「ままごと」という遊びをやっているかを考えなおしました。子どもたちは想像という力で絵本に描かれている物語を理解し、また「ままごと」においては、想像力の賜物なのだと感じることができました。玩具の食器を本物に見立て、お父さん役やお母さん役を演じ分けます。砂場ならば、砂を玩具の器に盛りご飯に見立てます。もちろん食べられないことは分か

っていながら、食べるふりを演じるのです。何かに見立てることや、演じることは、想像力以外の何ものでもありません。幼い子どもたちにも想像という力はちゃんと芽生えているのです。「子供のためのシェイクスピア」は観劇の対象年齢を小学校高学年からとしています。その年齢の子どもたちでも、演劇を理解しうるには舞台を見慣れる時間が必要であろうと思っていたのですが、子どもたちに備わっている想像力で十分に理解してくれることをあらためて知ることができました。

演出を担当するにあたって、シェイクスピアの戯曲をどのように子どもたちに伝えていけばいいのか、模索の日々が始まります。子どもたちの「がまんのコップ」は大人に比べて小さい、当然ながら集中できる持続時間も短いわけです。でも見かたを変えれば素直であるとも言えるわけですから、これをネガティブと捉えずにポジティブと捉えれば、違った発想も生まれてくるのではないかと。96年から演出をするうえで、私の中にはいくつかのキーワードがありました。

- ① 子どもに媚びない。
- ② 出演者を少人数にして、全員野球でいく。
- ③ 舞台装置、美術はシンプルにする。
- ④ 楽器を使う代わりにハンドクラップ(手拍子)をもちいる。

などです。①は私が87～93年まで出演していた幼児教育番組の毎年夏のツアー公演で感じた経験です。それは演劇とコンサートが混じり合った公演形式で、劇場に集まった子どもたちを盛り上げるために過剰なサービスにあふれていました。物語性に乏しく、番組のキャラクターと歌で盛り上げる構成でした。演劇では媚びるようなサービスは避け、物語に引き込む方法を見つけようと考えました。②～④は予算を削るという目的から生まれたものです。シェイク



子供たちの想像力に気づかされた初演『ロミオとジュリエット』

スピアの戯曲は、一人一役とすれば20～30人の出演者が必要です。さらに、よほどの役でない限り舞台上で演じる時間より待機する時間の方が長くなります。これは寂しい、1991年からグローブ座カンパニー公演に多数参加させていただき感じた経験です。常に出演者が舞台上にいて、全員野球で作品を作るためには、出演者の数を最小限にし、一人が何役かを兼ねるようにしました。自分の役以外では黒コートと黒い帽子を身につけ、従者や使者あるいはコソ的な役割を演じ、舞台転換の役割も果たすことができます。舞台装置や美術もできるだけシンプルにしたいと考え、オブジェ以外は机と椅子だけを用いて、劇場のセリなどの舞台機構は使わないことにしました。少人数で机と椅子これさえあれば芝居ができると感じてほしいと思ったからで、それは学校の教室には必ずある物だからです。④の楽器を使う代わりにハンドクラップをもちいる。これは当時のグローブ座の制作の方から、楽器を使ってはという意見があり、そこからの発想でした。私自身の経験で、公演で役者が楽器を使うことの大変さを身にしみていた経験があります。また、楽器を購入する予算、演奏のための練習などお金と時間は確実にかかります。そこで思いついたのがハンドクラップでした。これなら楽器を購入する必要はありません。

んし、誰もが持っているリズム楽器です。場面転換、登場人物の心象風景などさまざまな場面で打ち方を変えて手拍子というリズムで色をつけています。

私が「子供のためのシェイクスピア」で作品作りの準備をする際、もっとも子どもを意識するのは、上演台本を作成する時です。シェイクスピアの戯曲はすべて五幕から成り立っており、原作をそのまま上演すれば3時間から5時間になります。その原作を上演約2時間になるようにカットしていきます。それは、子どもたちの「がまんのコップ」を意識し、途中15分休憩をはさんで、芝居に集中できるのは2時間と考えているからです。シェイクスピアの戯曲は膨大な台詞から成り立っており、台詞という言葉で物語は始まり、動き、変化し、展開し、終幕を迎えます。その物語の全体的な姿を青々といっぱいの葉が茂り大地に根を張った巨木だとイメージしてみます。膨大な葉っぱに包まれて枝ぶりや幹の形が見えない巨木です。子どもたちにとってその樹の印象は、ただ「大きな樹」としか見えないでしょう。そこで、その葉っぱを台詞、枝ぶりを登場人物、幹の形をストーリーと考えます。幹(ストーリー)から枝(登場人物)が伸びその先から葉(台詞)が茂っている。台詞は言葉、言葉とはその名の通り言の葉です。その膨大な言の葉を剪定していきます。すると次第に枝ぶりや幹の形が見えてきます。そして混み合った枝も風通しがよくなるように剪定していくとはっきりと幹の形が見えてきます。幹の形はストーリー、その姿つまり形が見えてきます。こうなれば、ただ「大きな樹」だけの印象ではなくなり、幹や枝ぶりも形として目に残すことができます。幹の形には直幹、模様木、斜幹、文人木、懸崖、双幹、など様々な形があります。シェイクスピアの戯曲のストーリーにも悲劇、喜劇、歴史劇、ロマンス劇などのジャンルの中に様々な物語があります。そのストー

リーをしっかりと追っていけるように原文を剪定し上演台本を作っていきます。

また、膨大な台詞の中には独白と言われる長文の台詞があります。聞く相手がいない状態で喋る台詞です。殊に有名な独白はハムレットが吐く「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。」から始まる一人で喋る長い台詞です。ハムレットを演じる役者にとっては腕の見せ所であり、観客もその独白をどのように演じるかを楽しみにしている方々も多いことでしょう。けれども、それは『ハムレット』を見慣れている観客の場合です。見慣れているということは、ストーリー展開をすでに知っており、その方々は登場人物がどう演じるかをもっとも楽しみにしているとも言えるでしょう。ですが子どもたちにとって初めて知る物語であるということをお大切にしたいという思いがあります。ハムレットの独白の場合、ほとんどの台詞が自問自答を繰り返して、自分の悩みを秤にかけています。その悩みの状態を分かりやすくするために、一人だけで吐く台詞ではなく聞く相手がいる状態にします。その相手とは、先程書いた「黒コート」たちです。彼らの役目は、ハムレット自身の心の影であり、ハムレットの悩みを確かめるもう一人のハムレット自身であったりします。独白の台詞の自問と自答を分け、ハムレットと「黒コート」たちの割り台詞にしてモノローグの台詞を対話するダイアログの状態芝居を進めます。これはハムレットが導き出すはずの自答を、ハムレット自身が彼の耳で聞くことによって、思わぬリアクションが生まれくることに役立ち、独白という平面な場面を立体的に見せる効果があります。

子どもたちにとってシェイクスピアの作品を読むことや観る機会はとても少ないと思います。私自身、大学時代、演劇部に所属していた頃、シェイクスピアの戯曲を手に取り読み始めたものの、途中で挫折



〈「子供のためのシェイクスピア」上演記録〉

『マクベス』	2009年7月18日～7月26日 紀伊國屋サザンシアター 9回公演 出演：石田圭祐／伊沢磨紀／彩乃木崇之／戸谷昌弘／キム・テイ／若松力／窪田壮史／山崎清介
『シンベリン』	2008年7月12日～7月24日 あうるすぽっと 16回公演 出演：伊沢磨紀／佐藤誓／山口雅義／戸谷昌弘／土屋良太／石村みか／若松力／山崎清介
『夏の夜の夢』	2007年7月16日～7月23日 東京グローブ座 9公演 出演：伊沢磨紀／福井貴一／佐藤誓／山口雅義／戸谷昌弘／土屋良太／キム・テイ／大内めぐみ／山崎清介
『リチャード三世』	2006年7月13日～7月18日 東京グローブ座 7公演 出演：伊沢磨紀／福井貴一／佐藤誓／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／大内めぐみ／若松力／山崎清介
『尺には尺を』	2005年7月13日～7月19日 紀伊國屋サザンシアター 8公演 出演：伊沢磨紀／山口雅義／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／山谷典子／大内めぐみ／山崎清介
『ハムレット』	2004年7月15日～7月20日 世田谷パブリックシアター 8公演 出演：植本潤／岡まゆみ／福井貴一／伊沢磨紀／佐藤誓／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／佐藤あかり／山崎清介
『シンベリン』	2003年7月18日～7月22日 サンシャイン劇場 6公演 出演：間宮啓行／伊沢磨紀／佐藤誓／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／尾崎右宗／大内めぐみ／山崎清介
『ヴェニスの商人』	2002年7月17日～7月28日 旧東京グローブ座 13公演 出演：伊沢磨紀／木村多江／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／原田砂穂／山谷典子／山崎清介
『リチャード二世』	2001年7月13日～7月16日・22日～29日 旧東京グローブ座 14公演 出演：吉田鋼太郎／小須田康人／伊沢磨紀／佐藤誓／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介
『リア王』『十二夜』	2000年7月14日～7月29日 旧東京グローブ座 各8回 16公演 出演：小須田康人／伊沢磨紀／福井貴一／佐藤誓／植本潤／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典(長野公演のみ)／山崎清介
『オセロー』	1999年7月18日～8月1日 旧東京グローブ座 14公演 出演：佐藤誓／竹下明子／吉田鋼太郎／伊沢磨紀／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介
『ヘンリー四世』	1998年7月18日～8月2日 旧東京グローブ座 18公演 出演：小須田康人／伊沢磨紀／吉田鋼太郎／佐藤誓／植本潤／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介
『リア王』	1997年7月12日～7月27日 旧東京グローブ座 15公演 出演：小須田康人／伊沢磨紀／佐藤誓／植本潤／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介
『十二夜』	1996年7月27日～8月3日 旧東京グローブ座 10公演 出演：伊沢磨紀／山口智恵／渡辺美穂子／吉田鋼太郎／間宮啓行／彩乃木崇之／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介
『ロミオとジュリエット』	1995年7月27日～8月8日 旧東京グローブ座 15公演 出演：大井靖彦／伊沢磨紀／北村魚／佐藤誓／水きよし／桂憲一／植本潤／八代進一／間宮啓行／戸谷昌弘／明楽哲典／山崎清介



『マクベス』2009年



『リチャード三世』2006年



『シンベリン』2003年



『十二夜』2000年

した覚えがあります。演劇を志し上京後もいくつかのシェイクスピア作品の上演を観る機会がありましたが、かなり退屈でがまんのある舞台が多かったこともあります。それだけにシェイクスピア作品は難

しいという思いがいつの間にか頭にしみ込んでいたのかも知れません。実際、シェイクスピアの戯曲は芝居を立ち上げるための設計図ですから、読んで楽しむためには根気が必要です。膨大な台詞はときに

誰に向かって何のために言っているのかさえ分からなくなる時があります。その膨大な台詞を整理し、難しい単語を分かりやすくし、登場人物の人間関係をはっきりさせ、ストーリーがよく見えるようにすれば、シェイクスピアの書いた戯曲のストーリーは決して難しいものではないことが分かります。そのストーリーを大切に見せたい思いは、シェイクスピアを初めて観る子どもたちにとって、このストーリーこそ彼らの心を引っ張っていける原動力だと感じているからです。初めて目にする物語、そのストーリーをどれだけドキドキ感じるように作っていくか、これは大きなポイントです。その中に登場する人物たちには、人間が生きて行くうえで抱く様々な感情がしっかりと描かれています。その登場人物たちは物語の中でどのように生き、どのような行動をとり、どのような結末を迎えるのか。その生きざまを見守る感覚は演劇だけではなく映像においても同じです。しかし、演劇という舞台芸術が持つ力は、観る側の目の前で演じられるという現実です。この空気感は映像で得られるものではありません。写真や映像で動物を見るのと実際に目にするを思い出せば言うまでもありません。それは自然の風景においても建造物においても同じことだと言えます。実際に目にすることによって起こる思いは、言葉では言い表せない感動を与えてくれます。ですが演劇にとってこれほど恐い要素はないとも言えます。面白いと感じられるものを作っていかなければ観る側に感動を呼び起こすことができないという現実です。出演する役者たちにも高い演技力が要求されます。「子供のためのシェイクスピア」だからと言って、子ども向けの演技などはいっさい要求しません。私たちが作る芝居には大人も子どもも一人の観客であるという思いがあります。それは、子どもたちは大人以上に厳しい目を持っているとも言えるからで

す。つまらないものはつまらないと素直にはっきりと感じ取る心は、大人以上のものです。ですから、演じる側は大人と子どもの境界線はないものとして演じてもらいます。大人たちが真剣に自分の役柄に挑み、シェイクスピア作品を構築していかなければ、子どもたちも納得してくれないと私は信じています。舞台芸術のすべては、幕が開き幕が下りるまで観客とその空間を共有して成り立つ世界です。いったん幕が開けばNGは通用しない緊張感がそこにはあります。演じる側は相手役との芝居の距離を図りつつ同時に観客の反応も感じながら舞台の上で生きています。そこには舞台芸術ならではの演じる側と観る側の相互関係が生まれます。その相互関係なくして演劇を行うことはできません。同じ台本でも舞台の芝居が日々同じではないと言われるのは、劇場に来ていただくお客様が毎日同じではなく、客席の空気を感じながら役者は演じているからです。

初日を開けるまでの作品選び、キャスティング、上演台本作り、5週間に及ぶ稽古、劇場に入り数日間のスタッフワーク、総合舞台芸術と呼ばれる演劇は俳優とそれぞれの各スタッフの力がかみ合せて芝居を作り上げ、劇場という空間に観客が入り初めて幕が開き芝居が生まれます。それはわれわれ人間が一人では生きていけない社会と同じです。シェイクスピアという偉大な作家の芝居をたくさんの子どもたちに観てほしい、それが「子供のためのシェイクスピア」の総仕上げなのですから。

キーワード：がまんのコップ

集中できる持続時間は大人と子どもでは違います。その器の容量は人様々ですが、その器に入る中味をどう感じるかで大きさも変わってくるでしょう。時間を忘れるほど楽しく感じられるものは器の容量も膨大になります。演劇において、楽しいだけの世界観は緩急をつけるうえではあり得ないと言っても過言ではありません。起承転結の構造上、集中を求める部分があります。そこをどう魅せるか、これは私自身にとっての「がまんのコップ」でもあると言えるでしょう。

子どもに文化財を届けよう

子どものための文化財とは



さいとうはるみ
齋藤晴美

厚生労働省雇用均等・児童家庭局 育成環境課

1. はじめに

「すべての児童は良い遊び場と文化財を用意され、悪い環境から守られる」という児童憲章の理念を実現するため、児童福祉法において、「社会保障審議会により児童の健やかな育成に役立つ優れた舞台芸術、映像・メディア、出版物などの児童福祉文化財の推薦を行うこと」が定められています。

現在、厚生労働省に設置している社会保障審議会では、幼児向けの絵本や高校生向けの図書、保育士や児童館職員が保育や指導を行う上で参考となる出版物をはじめ、家族で楽しめる演劇や人形劇、ミュージカル、コンサート等の舞台芸術、映画、放送、DVD等の映像・メディア等の幅広い作品について、優れた児童福祉文化財の推薦を行っています。

◆児童福祉法第8条第7項

社会保障審議会及び都道府県児童福祉審議会は、児童及び知的障害者の福祉を図るため、芸能、出版物、がん具、遊戯等を推薦し、又はそれらを製作し、興行し、若しくは販売する者等に対し、必要な勧告をすることができる。

2. 社会保障審議会による児童福祉文化財推薦の経緯

本制度は、戦後まもなく、児童に悪影響を及ぼす出版物や映画が氾濫し、児童の不良化の一因として社会問題になっていたことから、昭和24年6月、児童福祉法に中央及び都道府県児童福祉審議会に、

児童及び知的障害者の福祉を図るため、芸能、出版物等を推薦、または勧告する権限が与えられたことから始まります。

当時、児童福祉法改正の提案理由説明で、林国務大臣は、「現状の世状に鑑み、家庭と並んで社会環境の整備が、児童の健やかな育成の見地から特に要請せられるものでありますが、とりわけ児童の精神的環境とも申すべき芸能、出版物、がん具等のあり方は、児童福祉の上から特に重視しなければならないのであります。中央及び都道府県児童福祉審議会は児童福祉の問題について、広く専門的知識を有せらるる民間の方々を中心として構成されており、もともこの問題について深い関心を払い、研究をいたしておるのであります。今般この審議会がこのような文化財の制作者等に対し、その自主的な改善を促進し得るよう規定を整備し、この面からも児童の福祉に遺憾なきを期していきたいのであります」と述べています。

平成13年、中央省庁の再編に伴って、中央児童福祉審議会は廃止され、新たに社会保障審議会を設置し、児童福祉文化財の推薦は、社会保障審議会福祉文化分科会に継承され、現在に至っています。

児童福祉文化財の推薦制度が創設された当時とは、だいぶ社会情勢も変わってきています。今日では、ゲームの普及などで子どもの遊びが孤立化する、

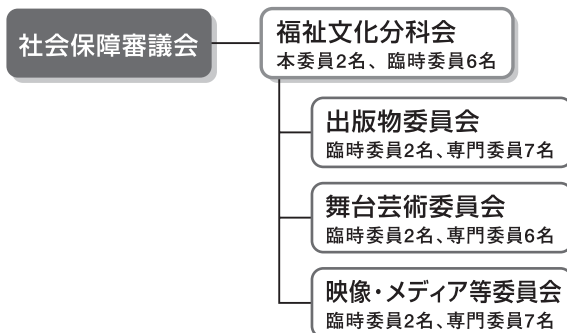
テレビでも悪影響を与えるようなシーンなどが放映されたりする、このような状況の中で、乳幼児の頃より親子で優れた児童福祉文化財に触れることは、児童の健全育成を図る上で、非常に重要となっています。

3. 社会保障審議会における児童福祉文化財の推薦

(1) 社会保障審議会の組織

優れた作品、公演等の審査を円滑に行うため、福祉文化分科会は、対象作品の分野ごとに「委員会」を設置して審議しています。

現在は、出版物委員会、舞台芸術委員会、映像・メディア等委員会の3つの委員会で構成されており、推薦の決定が委任されています。各委員会は、各分野における学識経験者の臨時委員と専門委員から構成され、それぞれの作品を審査しています。



(2) 審査の流れ

原則として、審査は制作者及び販売者からの申請に基づき行われることを基本としています。

これは、中央児童福祉審議会発足当時、思想表現の自由を守るため、憲法で禁止される「検閲」に当たらないよう、関係者からの申請を受けて初めて審査を行うこととされたという経緯があります。

制作者等から申請があった場合、福祉文化分科会は、まず、出版物委員会、舞台芸術委員会、映像・メディア等委員会の各専門委員会において、推薦の

基準により、審査を行います。

【推薦の基準】

- ・児童に適切な文化財であって、児童の道徳、情操、知能、体位等を向上せしめ、その生活内容を豊かにすることにより児童を社会の健全な一員とするために積極的な効果をもつもの。
- ・児童福祉に関する社会の責任を強調し児童の健全な育成に関する知識を広め、または、児童問題の解決についての関心及び理解を深める等、児童福祉思想の啓発普及に積極的な効果をもつもの。
- ・児童の保育、指導、レクリエーション等に関する知識及び技術の普及に積極的な効果をもつもの。

福祉文化分科会は、各委員会から報告された推薦候補作品について審議し、福祉文化分科会としての推薦を決定し、審議会の会長の同意を得て審議会における推薦となります。また、特に優れた作品は、特別推薦とします。

推薦作品には、「厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財」と記載することができます。

また、推薦に漏れた場合、そのことが関係者の不利益にならないよう配慮しています。

◆審査の流れ

審査は、制作者関係者等から申請に基づいて行うことが基本。

① 候補となる作品の選定

- ・候補となる作品は、原則として制作者及び販売者からの申請によるものとする。

② 委員会による審査

- ・申請された作品について、委員会において専門分野ごとに個別に審査し、推薦候補作品を分科会に報告する。

③ 分科会の決定

- ・分科会は、各委員会から報告された推薦候補作品について審議し、分科会としての推薦を決定する。特に優れた作品は特別推薦とする。

④ 審議会の推薦

- ・分科会において推薦された文化財は、審議会の会長の同意により、審議会における推薦となる。

※委員会は不定期、福祉文化分科会は2回～3回程度

4. 児童福祉文化財の推薦実績

児童福祉文化財の推薦は、昭和26年度から始まり、出版物、映画、幻灯、紙芝居、演劇の5分野でスタートしました。

昭和39年から放送(テレビ番組)が分野として追加され、幻灯、紙芝居については、昭和39年度までで、終了いたしました。昭和40年度から平成6年度までは、出版物、映画、演劇、放送(テレビ番組)の4分野の推薦が行われました。平成7年度から推薦分野を音響・映像等、出版物、舞台芸術の3分野に見直しを行う等、時代に即した内容に随時見直しを行ってきました。

中央児童福祉審議会が廃止され、社会保障審議会に継承された平成13年度より現行の出版物、舞台芸術、映像・メディア等の3分野になっています。

昭和26年度から平成20年度までに推薦された児童福祉文化財の総数は14,244点を数えます。

◆推薦総数(昭和26年度～平成20年度)

出版物	映画	幻灯	紙芝居	舞台芸術	児童劇脚本	放送	音響	総数
10,337	1,579	209	441	887	24	758	9	14,244

平成20年度の推薦児童福祉文化財の数は、以下の通りです。

○平成20年度の推薦数 102点

出版物：60点 舞台芸術：22点

映像・メディア等：20点

○平成20年度の特選推薦 15点

出版物：6点 舞台芸術：4点

映像・メディア等：5点

5. 推薦児童福祉文化財の普及について

(1) 推薦児童福祉文化財の周知について

推薦された児童福祉文化財を一人でも多くの子ども

もたちや子育て中の親子、保育士や児童厚生員、子育てボランティア等子どもと関わっている方々に知ってもらい、活用してもらう必要があります。

推薦児童福祉文化財は、毎年「児童福祉文化財年報」に掲載され、児童館をはじめとする児童福祉施設や母親クラブ、都道府県や教育委員会等の関係団体や各種機関に周知されています。

また、厚生労働省のホームページ(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/hosho.html#fukusi>)に最新の推薦児童福祉文化財一覧を掲載しています。本年度においては、厚生労働省のホームページへの掲載を工夫するとともに、子育てに関する情報を提供しているi-子育てネットをはじめ、関係団体のホームページにも掲載いただきました。また、平成20年度に推薦された児童福祉文化財(出版物)をとりまとめ、広報・啓発ポスターを作成し、配布したところです。本ポスターは、各自治体をはじめ、児童福祉施設や図書館関係者の方々等にご協力をいただき、より多くの子どもたちや子育て中の親子が集まる機会の多い児童館や保育所、乳幼児健診の場、図書館等に掲示していただき、児童の健全育成の推進に役立てていただくこととしています。

(2) 児童福祉文化賞について

(財)児童健全育成推進財団と(財)こども未来財団の共催により、社会保障審議会において推薦された児童福祉文化財の中からとりわけ優れた作品に対して、出版物、舞台芸術、映像・メディア等の各部門ごとに「児童福祉文化賞」、「児童福祉文化賞推薦作品」として、厚生労働大臣表彰を行っています。本表彰は、制作者サイドの励みとなり、良質な児童福祉文化財の制作意欲の向上につながるものと考えています。

(3) 優良児童劇巡回等事業について

また、子どもたちが実際に推薦児童福祉文化財に触れる機会の提供として、昭和62年度から(財)児童健全育成推進財団が児童劇巡回事業やこども映画祭を実施しています。

児童劇巡回事業は、夏休みや冬休み等の期間に、全国各地の児童館を巡回し、社会保障審議会で推薦された児童劇のうち参加体験型になじむものを厳選し、上演するものですが、舞台公演に加え子供たちに表現の楽しさに触れてもらうため、例えば人形劇なら実際に子どもたちと一っしょに人形を作ったり、動かし方や遊び方を紹介するなどのワークショップを合わせて実施するとともに、児童館の機能を活用しつつ、子供たちが準備段階から参加し、ポスターや看板、チケットの作成などに自主的に取り組むことにより自主性を高めるなど子供たちの育成指導の一環になるような工夫を行いつつ実施しています。

こども映画祭は、児童劇巡回事業と同様に社会保障審議会で推薦を受けた映画を夏休み、冬休み等の期間に児童館において上映するものです。こども映画祭の実施に当たっては、映画の内容や鑑賞のポイントなどをわかりやすくするための解説書を作成し、配布しています。人格の形成にとって大切な時期に優良な映画を観ることは、子どもに感動を与えるだけでなく、子どもの将来の生き方に多大な影響を与えます。このため、こども映画祭では、ヒットした劇場用の映画や優良作品にもかかわらず劇場公開されなかった作品などを組み合わせ、児童に豊かな情操が育まれるよう、質の高いプログラムを組むように配慮しています。

6. おわりに

関係各位の皆様におかれましては、次代を担う子



児童福祉文化財のポスター(20年度推薦作品)

本ポスターは厚生労働省のホームページ(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/index.html>)からも、ダウンロードできます。

どもたちのために優れた児童福祉文化財が提供されますよう、一層のご支援とご尽力をお願い申し上げますとともに、今後とも、厚生労働省では、児童福祉文化財の推薦活動を通じて、子どもたちが優良文化財にふれる機会が増えるよう努めてまいりたいと考えております。

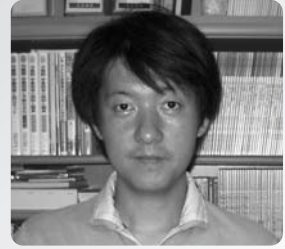
キーワード：児童健全育成

「すべての子どもの生活の保全と情緒の安定を図り、一人ひとりの個性と発達段階に応じて、全人格的に健やかに育てる」こと。健全育成施策として、広く一般の家庭にある児童を対象として、児童の可能性を伸ばし、身体的、精神的、社会的に健全な人間形成に資するため、児童福祉文化財の推薦をはじめ、生活環境条件の整備、児童とその家庭に対する相談援助等を行っている。

子どもに文化財を届けよう

児童福祉文化財の 有効活用システム

—子どものための文化財の活用について—



う え き し ん い ち

新潟県立大学 准教授

植木信一

1. はじめに

内閣府の行政刷新会議ワーキングチームによる「事業仕分け」が2009(平成21)年11月に実施されたことは記憶に新しい。このうち、「優良児童劇巡回等事業」が、仕分け項目の一つとして評決(11月16日第4日目：第2ワーキンググループ番号2-28)され、異例の「予算要求通り」とされた。

ワーキンググループの評価結果「速報版」によると、次のような「とりまとめコメント」が掲載されている。「子どもたちに直接、夢と希望を与えるような事業については基本的に大切にすべきということである。もちろん、文化庁や文科省との重複がないように厚生労働省としてやる意義、即ち、子どもたちに良質な芸術や文化に触れさせると同時に、子どもたちの居場所を作ること、また子どもたちに参加の機会を与えるということがコンセプトであったと思うので、このコンセプトをしっかりと守った上で事業を続けていただきたい。特に、厳しい財政状況の中で劇団の方たちが苦勞しているという現実があるので、皆さんが頑張っていただけよう配慮を求めたいと思う。」

この「優良児童劇巡回等事業」とは、厚生労働省が補助し、財団法人児童健全育成推進財団が実施する「児童劇巡回事業」と「こども映画祭」、「児童厚生員等研修事業」および「放課後子どもプラン指導

者研修等事業」のことをいうが、上記コメントの内容が示す事業は、このうち「児童劇巡回事業」と「こども映画祭」のことを示していると思われる。

2. 児童福祉文化財の有効活用に関する研究

旧中央児童福祉審議会および今日の社会保障審議会による児童福祉文化財の推薦活動は、1951(昭和26)年から現在まで継続されている。現在は、厚生労働省社会保障審議会福祉文化分科会によって、①舞台芸術、②映像・メディア、③出版物の3分野で児童福祉文化財の推薦が実施されている。これら推薦文化財を活用した具体的事業の実施に関しても一定の継続実績があり、子どものための文化財の活用において重要な役割を果たしてきた。

そこで、児童福祉文化財の効果的な普及やより有効な活用のためには、具体的な実態分析が不可欠であると考え、2006(平成18)年に、「児童福祉文化財の効果的な普及に関する調査研究」をまとめ報告した*。

研究成果のうち、児童福祉文化財を活用した事業による「子どもたちの変化」と「事業活用後の効果」について紹介する。なお、ここでいう「児童福祉文化財を活用した事業」とは、「児童劇巡回事業」と「こども映画祭」のことである。両事業とも財団法人児童健全育成推進財団による委託事業で、児童館等を拠点に実施される事業である。

3. 児童福祉文化財を活用した子どもたちの変化

(1) 「児童劇巡回事業」に参加した子どもたちの変化
「活動に満足し、次への期待を持った」(203件)との回答が、最も多く、児童劇巡回事業に対する満

足度がうかがえる(表1)。次いで「児童館の企画に対して積極的に参加するようになった」(134件)、「児童館に来館する機会が増えた」(102件)、「舞台芸術に興味や関心を示すようになった」(93件)、「表情が明るくなってきた」(76件)となっている(いずれも複数回答)。

〈表1〉「児童劇巡回事業」に参加した子どもたちの変化

(順位)	(変化項目)	(件数)
1	活動に満足し、次への期待を持った	203
2	児童館の企画に対して積極的に参加するようになった	134
3	児童館に来館する機会が増えた	102
4	舞台芸術に興味や関心を示すようになった	93
5	表情が明るくなってきた	76
6	感情表現が豊かになってきた	75
7	友達が増えてコミュニケーション関係が広がった	72
8	児童館職員に関わってくる場面が増えた	66
9	普段の行動が活発になってきた	56
10	子どもたちから進んで企画を提案するようになった	41
11	特に変化は見られなかった	22
12	舞台芸術に関する活動に参加するようになった	14

「表情が明るくなってきた」(76件)となっている(いずれも複数回答)。

子どもたち自身の発達に寄与する変化項目について、満遍なく回答があり、事業に関わる子どもたちの変化のようすがうかがえる。事業を実施する児童館への参加意欲を含め、幅広い効果の結果を示している。

(2) 「こども映画祭」に参加した子どもたちの変化

「活動に満足し、次への期待を持った」(155件)が、最も多く、こども映画祭に対する満足度がうかがえる(表2)。次いで「児童館の企画に対して積極的に参加するようになった」(103件)、「児童館に来館する機会が増えた」(93件)、「映像・メディアに興味や関心を示すようになった」(66件)、「友達が増えてコミュニケーション関係が広がった」(52件)、「表情が明るくなってきた」(50件)となっている(いずれも複数回答)。

〈表2〉「こども映画祭」に参加した子どもたちの変化

(順位)	(変化項目)	(件数)
1	活動に満足し、次への期待を持った	155
2	児童館の企画に対して積極的に参加するようになった	103
3	児童館に来館する機会が増えた	93
4	映像・メディアに興味や関心を示すようになった	66
5	友達が増えてコミュニケーション関係が広がった	52
6	表情が明るくなってきた	50
6	児童館職員に関わってくる場面が増えた	50
8	感情表現が豊かになってきた	44
9	子どもたちから進んで企画を提案するようになった	35
10	特に変化は見られなかった	32
11	普段の行動が活発になってきた	31
12	映像・メディアに関する活動に参加するようになった	12

事業を実施する児童館への参加意欲の向上のほかに、子どもたち自身の変化に発達上の効果があったことを示している。

4. 事業活用後の効果について

(1) 「児童劇巡回事業」による効果

事業の実施前と実施後の効果測定の結果、おおむね「事業実施前の期待」どおり「事業実施後の効果」が現れていることが明らかになった(表3)。推薦文化財においてその質が担保された作品を児童館という身近な場所で上演できるメリットは大きい。

同時に、子どもたちに与える影響も大きいことがわかる。「児童劇巡回事業」は、劇団員と子どもたちの「ワークショップ」が上演とセットになっており、子どもの健全育成を推進する児童館だからこそその特徴ともいえる。また、子どもたちに直接関わる職員の意識(モチベーション)向上にも効果をあげていることもわかる。

(2) 「こども映画祭」による効果

こども映画祭の実施に関しても、事業の実施前と実施後の効果測定の結果、ほぼ「実施前の期待」どおり「実施後の効果」が現れていることがわかる(表4)。

子どもたちが上映する職員と一緒に「こども映画祭」のための準備活動を行うことが上映とセットになっており、子どもたちが事業に直接関わることによって、子どもたちに与える影響も大きいことがわかる。

推薦文化財においてその質が担保された作品を児童館という身近な場所で上映できるメリットは大きい。子どもの健全育成を推進する児童館だからこそその特徴ともいえるだろう。

また、児童館に来館児童が増えるという効果をもたらすことも、こども映画祭の特徴といえるのではないか。

5. 効果的に実施できた理由について

(1) 「児童劇巡回事業」が効果的に実施できた理由

「推薦文化財作品そのものの内容や質が高かったから」(216件)が最も多い(表5)。推薦文化財の本来の意義を示しているものであると考えられる。本来担保されるべき推薦文化財作品の質が、実際にも内容や質の高さとして証明されたものといえる。

また、次いで「児童館が身近で気軽に楽しく参加できる施設だから」(190件)については、当該地域において身近で利用しやすい児童福祉施設である児童館の本来の利点を示しているものと思われる(いずれも複数回答)。

(2) 「こども映画祭」が効果的に実施できた理由

多い理由の「推薦文化財作品そのものの内容や質が高かったから」(186件)は、推薦文化財の本来の

〈表3〉「児童劇巡回事業」における期待と効果

(事業実施前の期待)	(順位)	(事業実施後の効果)
身近な場所で良質な作品にふれること	1	1 身近な場所で良質な作品にふれること
子どもたちに本物の作品をみせること	2	2 子どもたちに本物の作品をみせること
子ども自身の楽しみが増す	3	3 子ども自身の楽しみが増す
子どもの感情表現が豊かになる	4	4 職員の意識(モチベーション)向上
子どもの児童館活動による影響	5	5 子どもの児童館活動による影響
職員の意識(モチベーション)向上	6	6 子どもの感情表現が豊かになる

〈表4〉「こども映画祭」における期待と効果

(実施前の期待)	(順位)	(実施後の効果)
子ども自身の楽しみが増す	1	1 身近な場所で良質な作品にふれること
身近な場所で良質な作品にふれること	2	2 子どもたちに本物の映画(フィルム)をみせること
子どもたちに本物の映画(フィルム)をみせること	3	3 子ども自身の楽しみが増す
子どもの感情表現が豊かになる	4	4 子どもの児童館活動による影響
子どもの児童館活動による影響	5	5 児童館に来館児童が増える
児童館に来館児童が増える	6	6 既存の児童館プログラムによる影響

意義を示しているものである(表6)。本来担保されるべき推薦文化財作品の質が、実際にも内容や質の高さとして証明されたものといえる。

また、次いで「児童館が身近で気軽に楽しく参加できる施設だから」(173件)については、当該地域において身近で利用しやすい児童福祉施設である児童館の本来の利点を示しているものと思われる。

「親子と一緒に参加できるプログラムだったから」(119件)も多いことがわかる(いずれも複数回答)。良質な上映作品を安心して親子で鑑賞できることも、このこども映画祭の重要な特徴であるといえるのではない。

6. 結論と提言

(1) 「児童福祉文化財」の有効活用について

①児童福祉文化財は、推薦作品内容について一定の「良質性」が保障されている。したがって、安心して活用することができ、できるだけ多くの人に対して、広く社会的に活用されることが望ましい。児童健全育成の推進という目的に直接役立つものとして、大いに期待される。

②児童福祉文化財とは、一方的な作品提供ではなく、子どもたちが、楽しく主体的に関わることによって、健全育成の効果が促されることがわかっている。そうした児童福祉文化財の持つ積極的な意味を意識しながら、実践現場における活用の推進が期待される。

③地域組織活動(母親クラブ等)の活動内容への利用としても効果的である。地域組織活動(母親クラブ等)へ

も内容が十分に行き渡るような工夫を講ずることで、地域組織活動(母親クラブ等)の育成にも貢献することができる。

(2) 「児童劇巡回事業」の有効活用について

①児童巡回劇事業実施前の期待どおり実施後の効果が現れていることが明らかになっている。特に「子どもたちに与える影響」が大きく、児童健全育成を推進する児童館で実施することの意義が証明されたかたちとなっているため、今後も児童館事業として継続活用されることが望ましい。

②児童劇巡回事業が、毎年全国規模で実施されることで、地方にも児童福祉文化財が行き届くとともに、良い作品にふれる機会を子どもたちに保障する重要な役割を持つ。今後とも全国に満遍なく行

〈表5〉「児童劇巡回事業」が効果的に実施できた理由

(順位)	(理由項目)	(件数)
1	推薦文化財作品そのものの内容や質が高かったから	216
2	児童館が身近で気軽に楽しく参加できる施設だから	190
3	事業実施当日のプログラム内容が良かったから	153
4	親子と一緒に参加できるプログラムだったから	140
5	事業実施にともないワークショップを実施したから	116
6	事業実施までの準備の取り組みの過程が良かったから	67
7	事業実施後の反省会の取り組みがあったから	15

〈表6〉「こども映画祭」が効果的に実施できた理由

(順位)	(理由項目)	(件数)
1	推薦文化財作品そのものの内容や質が高かったから	186
2	児童館が身近で気軽に楽しく参加できる施設だから	173
3	親子と一緒に参加できるプログラムだったから	119
4	親事業実施当日のプログラム内容が良かったから	39
5	事業実施までの準備の取り組みの過程が良かったから	32
6	事業実施にともないワークショップを実施したから	18
7	事業実施後の反省会の取り組みがあったから	7

き渡るような事業規模の維持、拡大が求められる。同時に、より効率的な実施方法の検討もされなければならない。

③「子どもスタッフ」の組織等、子どもたちと一緒に取り組むことができ、子どもを巻き込みながら児童館巡回事業を実施することができる。このように、単なる演劇上演のみに終わることなく、事業内容をその後の児童館プログラムにも継続的に応用するなど、積極的な現場実践プログラムの開発・工夫が求められる。

④劇団との「ワークショップ」がセットになっている場合が多く、年齢や性別に関係なく広く一般市民が参加できるメリットがある。したがって、児童館内だけでなく、広く地域社会に開放しながら、地域全体の文化に貢献できるような事業活用が期待される。

(3) 「こども映画祭」の有効活用について

①子どもたちが準備段階から、楽しく興味を持ちながら関わることで、単なる上映会のみにならない児童健全育成に寄与するプログラムとしての展開の広がりが可能となっている。今後も児童館対象事業として維持継続されることが望ましい。

②現場からは、DVD等最新機器に対応可能な手段での提供を望む声もある。多様な提供方法の検討も必要だろう。しかし、それらの手段が、どのように子どもの健全育成や発達を促すものと成り得るのかを再検証することが必要である。

③こども映画祭実施前の期待どおり実施後の効果が現れていることが明らかになっている。良質な作品で子ども自身の楽しみが増すほか、子どもたちも16ミリ映写機等に興味を示すなど、映像・メディア等に参加する行動をもって「本物の映画作品」を体感できる良さがあり、そうした効果を見

児童館の意図的な関わりによって実現させることが期待される。

④16ミリ映画フィルムの老朽化や映写機の取り扱い技術の調達などに課題を残すこともあり、映写に関わる技術的な支援等も必要となる場合がある。そうした課題をクリアするために、従来から児童館に関わるボランティア人材を活用するなど、実施児童館にとっては、普段からのネットワーク形成も事業を成功させる重要な要素となる。

参考文献

- 1、2005年、『児童福祉文化財年報～社会保障審議会推薦児童福祉文化財目録～（平成15年度）』財団法人日本児童福祉協会
- 2、2006年、『同上（平成16年度）』財団法人日本児童福祉協会
- 3、2007年、『同上（平成17年度）』財団法人日本児童福祉協会
- 4、2008年、『同上（平成18年度）』財団法人日本児童福祉協会
- 5、鈴木雄司、2005年、「児童文化における児童福祉文化財の位置づけ 研究ノート～中央児童福祉審議会等児童福祉文化財推薦・勧告の取り組みを通じて～」(日本児童学会『児童研究第84巻』)

※児童福祉文化財研究会(主任研究者：片岡玲子立正大学心理学部教授)『児童福祉文化財の効果的な普及に関する調査研究(財団法人こども未来財団平成17年度児童関連サービスマ調査研究等報告書)』2006年。全国の児童館(大型児童館、大型児童センター、児童センター、小型児童館)のうち、「児童館巡回事業」あるいは「こども映画祭」を過去3年間に実施した956か所を、財団法人児童健全育成推進財団の協力を得てピックアップし、調査対象とした。実施時期は、2005(平成17)年11月、郵送にて調査した。回収数614部、回収率64.2%であった。

キーワード：放課後子どもプラン

共働き家庭など留守家庭のおおむね10歳未満の児童を対象とする「放課後児童健全育成事業」(厚生労働省管轄)と、すべての小学生を対象とする「放課後子ども教室推進事業」(文部科学省管轄)を一体的あるいは連携して実施する事業のことをいう。各市町村にて2007(平成19)年度より実施されている。全都道府県、政令指定都市および中核市に「放課後子どもプラン推進委員会」を設置することで、域内の総合的な放課後対策のあり方を検討することになっている。

子どもに文化財を届けよう

児童館における 文化財の活動



すずきゆうじ
東京福祉大学社会福祉学部 教授 鈴木雄司

1. 日本の伝統文化を伝える

子どもたちの和太鼓活動

「わたしはたいこサークルに入ってとてもうれしいことがあります。一つ目がたいこがうまくなることです。二つ目は、みんなの前でやると、さいごにはくしゅをもらえるからです。……ほんとうにたいこサークルに入ってよかった」(小2年女子)、「わたしはこんな大きなぶたい(東京都児童館交歓フェスティバル)に出るのは2回目です。やる前からむねがはりさけそうでした。でも、やった時は、ぜんぜんむねがはりさけませんでした」(小2年女子)。調布市の児童館の太鼓サークルに入って練習をしてきた子どもたちの感想の一文である。子どもたちの太鼓に対する思いと発表での緊張感がみずみずしく表現されている。

週1回の練習に小学生から中学生まで数十人が集

まり、講師、職員の指導のもとに練習を積み重ねていく。ばちの握り方、太鼓の打ち方、手の使い方を習い、繰り返しの練習が続く。楽しい時もあれば、厭になる時もある。数か月の練習の成果は、秋の児童館まつり、2月のサークル発表会、東京都児童館交歓フェスティバルで実る。観衆からの優しさと励ましを含んだ拍手は、子どもたちの気持ちを充実感でいっぱいにさせる。

地域の児童館に遊びに来たところから、「面白しろそうだな、友達もやっているから」との動機で活動がスタートし、伝統的な日本の文化が、地域の遊び場、児童館から発展していく。特に高い費用がかかるわけでもない、特別な子どもたちでもない、日常の遊び仲間から生まれた活動である。子どもたちのニーズと太鼓の持つ楽しさ、迫力、伝統文化が結合した結果である。



調布市立深大寺児童館での和太鼓の練習風景(1992年)

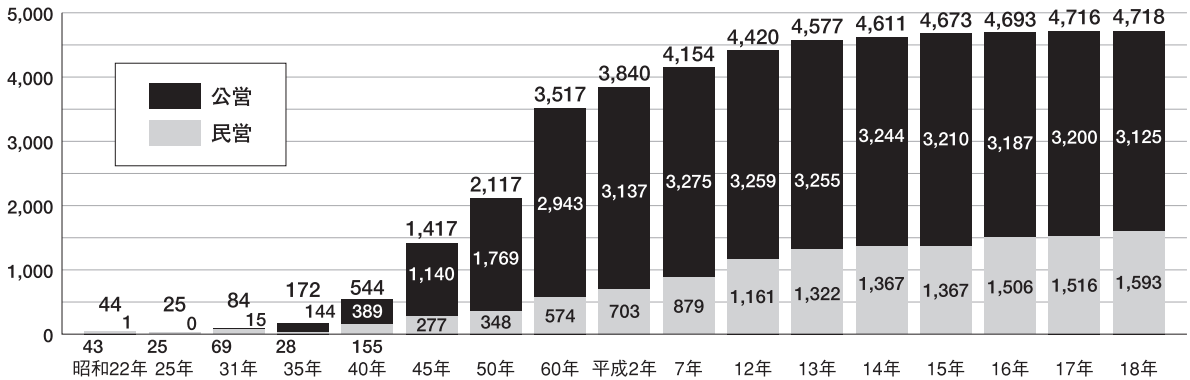
2. 児童館の概要と現状

児童館は、1947(昭和22)年に制定された児童福祉法第40条に「児童厚生施設は、児童遊園、児童館等児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、または、情操を豊かにすることを目的とする施設とする」と規定された児童福祉施設の一つである。児童福祉法のすべての児童を対象とした健全育成の理念を具現化した施設とも言える。

〈図1〉児童館数(公営・民営別)の推移

○児童館は、昭和40年代から50年代にかけて、高度経済成長もたらした子どもの事故の多発やいわゆる「かぎっ子」の増加等により急激に増加したが、その後上昇カーブは緩やかになり、ここ数年はほぼ横ばいで推移している。

○公営・民営別では、公営が平成7年をピークに減少に転じているものの、民営は最近でも徐々に増えている傾向にある。



(注)児童館には、小型児童館、児童センター、大型児童館及びその他児童館を含む。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局育成環境課提供(各年10月1日現在の数値)

現在、全国に4,718ヶ所設置(平成18年10現在)され、小型、児童センター、大型に分類される。実施主体は、都道府県、指定都市、市区町村、社会福祉法人等であるが、最近では、各自治体で、コスト削減、サービス向上の視点から指定管理者制度の導入が進んでいる。

3. 児童館の機能と構造

児童館の機能と構造は、コンピューターのシステムをイメージすると理解しやすい。図2をご覧ください。児童館は、ハードとしての施設・設備がまず整っていることである。そこにソフトとしてのプログラム・活動メニューが用意され、さらに児童館の施設、プログラムをコントロールするマンパワーとして、“児童の遊びを指導する者”(児童厚生員)が配置される。いわば基盤整備である。こうした、条件下において子どもや保護者、地域の様々な大人がかかわることで、創意工夫のある活動が展開され

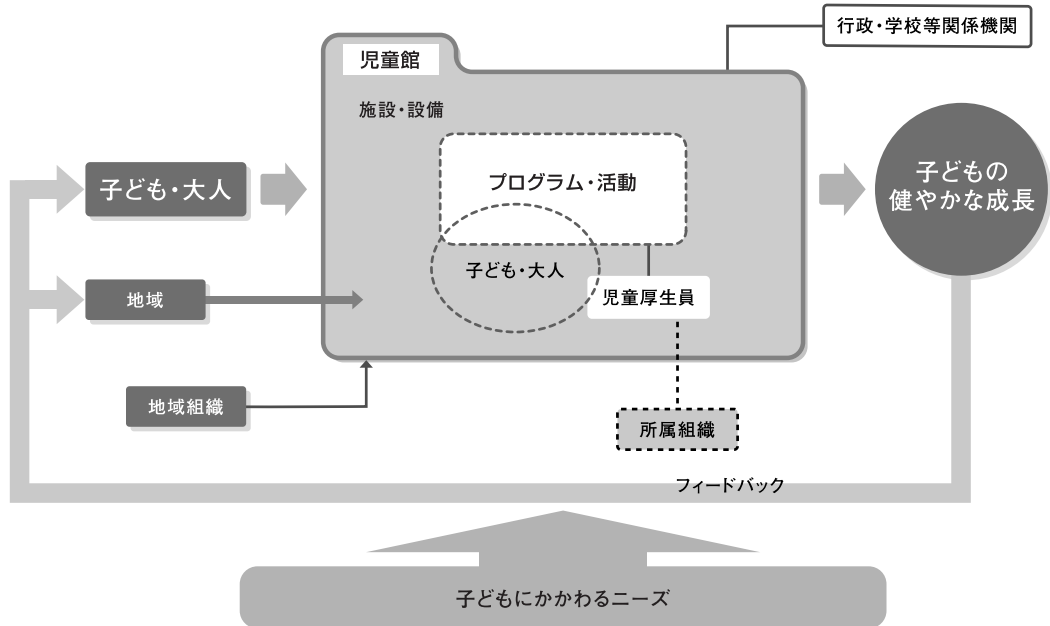
ていくことになる。遊びを中心にスポーツ、創作活動、文化活動、地域行事が取り組まれる。これらの意図的な活動の結果として、子どもの健やかな成長が図られるという構造である。

児童館の活動を充実したものにするためには、つねに子どものニーズに基づいた企画立案と子ども自身の参加に努めなければならない。また、状況に応じて活動の見直しが必要である。児童館での文化財にかかわる活動は、子どもを中心に保護者や地域、学校とのかかわり、地域の文化財、社会一般の文化活動の動きと大きく連動しているのが特徴である。

4. 児童館における文化財の活動

児童憲章は、日本国憲法の精神にしたがいが、すべての児童の幸福をはかるために、「児童は、人として尊ばれる。児童は、社会の一員として重んぜられる。児童は、よい環境のなかで育てられる。」と宣言している。この宣言の第9に「すべての児童は、

〈図2〉 児童館の機能と構造



よい遊び場と文化財を用意され、わるい環境からまもられる。」と明記されている。ここに児童館における文化財活動の根拠が示されている。

児童館における文化財の活動は、いくつかのジャンルに分かれ、地域の児童館の条件を生かしながら展開されている。主な活動分野を紹介する。

① 図書室での絵本、児童図書の読み聞かせ

児童福祉施設最低基準第37条-2には、児童館には図書室を設けることとされている。児童館の文化財に最も関係の深いところである。図書室には、絵本、児童図書、科学本などが子どものニーズに合わせて用意され、子どもたちが、遊びの延長として、また、少しの息抜きの時間として利用している。また地域のボランティアによる読み聞かせも行われ、子どもたちの楽しい時間になっている。読み手は、児童の保護者や地域文庫の活動に参加している人たちである。子どもとのふれあいは、かかわる大人たちにおいても貴重な経験と

なっている。絵本との出会いから、人形劇の会を結成して活動を広げるグループも生まれている。図書館の児童コーナーに類似しているが、相違点は児童館の他の活動と結びついていることである。

② 演劇・映画(ビデオ)の鑑賞

児童向けの演劇や映画(ビデオ)を鑑賞する活動は各地の児童館で取り組まれている。子どもたちに良い文化財を提供することは、児童館の重要な役割の一つである。また、実際に演劇の活動に、子どもたちの発想を劇グループに発展させて展開しているところもある。数年前まで児童健全育成推進財団で行われていた「劇あそびフェスティバル」「キリンリーダーシアター」は、その全国版であり、子どもたちの活動の貴重な発表の場となっていた。

③ 音楽・ダンスの活動

杉並区に「ゆう杉並」と呼ばれる中高校生専用

の児童館が平成9年に開館した。この児童館のプログラムにバンド活動がある。スタジオが用意され、無料で練習ができ、子どもたちの人気を集めている。現在、中高校生の活動に取り組む児童館が増え、音楽バンドの活動が盛んである。東京の品川区では、小学生バンドが結成され、いくつものグループが児童館や地域で活躍している。ダンスの活動はまだ特定の児童館に限定されているが、これも中高校生の施設・整備が整ったところでは、確実な広がりを見せている。



品川区の児童館における小学生バンドの様子

を認め、地域社会や行政が様々な支援を行い、活動を育むことが求められている。子どもに起きている否定的な問題をみたとき、文化財の活動は問題解決の一つの基礎的な力になるのではないだろうか。今後の児童館での発展を願わずにはいられない。

参考文献

- ・中山 茂 1976年「児童のための文化財」児童健全育成の理論 朝日生命厚生事業団
- ・調布市立深大寺児童館 1993年「みなno作文&太鼓つうしん No.1～31」
- ・鈴木雄司 2001年「児童文化における児童福祉文化財の位置付け」児童育成研究第19巻 日本児童育成学会
- ・調布市立緑が丘児童館和太鼓サークル 2003年「みなno作文&太鼓つうしん No.1～20」
- ・片岡玲子 2006年5月「児童館と児童福祉文化財の活用」こども未来 こども未来財団
- ・鈴木雄司 2007年「児童館の現状と課題」児童館 財団法人児童健全育成推進財団
- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局育成環境課 2008年4月「児童館の現状と課題」こども未来 こども未来財団

5. 今後の課題

児童館における文化財の活動は、児童館の遊びの延長として考えられことから、そこにはつねに、楽しさや面白さが加わる。同時に活動が子どもたちを中心に置きながら、保護者や地域の大人を巻き込み、大人たち自身も子どもとのかかわりのなかで、新しい発見やつながりを創造している。さらに、地域にある文化財との結合や地域の諸組織との連携により、大きな発展が生まれてくるという流れをもっている。先に紹介した和太鼓の活動も、児童館の一室から始まったが、その後、地域の小学校にまで広がり、6年生の卒業式のプログラムに取り入れられたという。

今後は、こうした児童館での文化財の活動の意義

キーワード：児童館

児童館は、児童福祉法第40条に規定された児童厚生施設である。児童憲章には、「すべての児童は、よい遊び場と文化財を用意され、わるい環境からまもられる。」と明記されている。ここに児童館における文化財活動の根拠が示されている。児童館を拠点に図書、演劇、音楽、ダンス等の文化財の活動が、子どもを中心に保護者、地域の大人を巻き込みながら展開されている。

子ども文化財の多様な展開

児童福祉施設の 子どもと文化活動



お お たい っ べい
児童養護施設 八楽児童寮 寮長 **太田一平**

施設文化とは

文化とは、児童の道徳、情操、知能、健康を向上させ、日々の生活をより豊かにさせるものです。それは、児童を社会の健全な一員として育むために積極的な効果をもたらすものであり、その取り組みには様々なものがあります。それぞれの施設では日々、スポーツ活動、芸能活動、芸術活動、知的活動、地域伝統文化伝承活動、生活様式、歳時記、異文化交流等々といろいろな取り組みが盛んに行われています。そこで、児童福祉施設における文化活動の取り組みについて児童養護施設、児童自立支援施設、母子生活支援施設、情緒障害児短期治療施設の現場からポルタージュしたものをここに紹介します。

土づくりは人づくり

群馬県：児童養護施設「フランシスコの町」

児童指導員 坂井 勉

当施設は、平成16年3月に大舎制から10人のユニットケアに新築移転しました。各ユニットには台所があり、子どもたちが食材に触れる機会が増えました。ちょうどその頃、施設の隣地を借りて菜園を始めました。菜園といっても以前は3メートルもある竹藪だった場所で、トラック2台分の堆肥を入れ、次に石灰を散布し、加えて三要素の肥料を撒きトラ



収穫したとうもろこしを手に思わず笑顔がこぼれる子どもたち。「絶対おいしいよ！」

「次の収穫が楽しみだね」。みんなで一生懸命畑を耕し、種をまきます。「早く大きくなーれ！」



クターで耕し土作りから始めました。

丹精込めた土で育てた野菜は格別な旨味があり、子どもたちは自分で作ったから食べてみたいと、嫌いだっただんごやピーマンやブロッコリーも、「美味しい！」と歓声をあげながら食べるようになりました。畑作りは、作る楽しさと食べる喜び、それに加えて畑に出ると心が開放され伸び伸びと話ができ、子どもと職員の会話の場となりました。

また、畑作りを通して近隣の方との触れ合いも生

まれました。農家の方や散歩中の方が立ち止まっては、「畑がきれいになって気持ちがいいねえ」「いいのができましたねえ」「大きくなりましたねえ」と声をかけてくださいます。そしてついに、畑には「ふれあい農場」という看板が上がりました。野菜の収穫時期には近所にもおすそ分けができ、ますます距離が近づいた感があり、地域の中で施設を理解してもらえるよい機会となりました。

私たちは、子どもの育ちを信じて、生活環境を整え、種をまき、栄養と潤いを与え、そして、子どもたちは、栄養を吸収して健やかに育ち自立していきます。子どもたちの実りを見ることはなかなかないけれど、自分たちの関わり方と、子どもの力を信じて、今日も子どもたちと共に我が園の文化活動の一環として畑仕事に精を出しています。

お母さん方のリフレッシュ

東京都：母子生活支援施設「皐月」

施設長 金子裕子

我が園では、資生堂社会福祉事業財団のご好意により、資生堂社員の方を講師に迎え当施設の利用者を対象とした「ビューティーアップ講座」が開催されました。

利用者の方に美容に関する“お悩みアンケート”を実施した結果をもとに、第一回は「好感のもたれるメイクアップ」をテーマとしたスキンケアとメイクアップの方法について、120分間の講座を開催しました。講座には10名の利用者が参加者し、お化粧の仕方やアドバイスを受ける事ができました。

講座終了後、利用者の方からは口々に「楽しかった」「自分に自信が持てるようになった」「おしゃれをしてみたくなった」「分かりやすく教えていただけた」「自分のお肌をいたわってあげたい」と喜びの声が多数集まりました。女性にとって「美しくな



女性にとってお化粧は心の栄養です。
好評だった「ビューティーアップ講座」

ること」「自分をいたわること」は心の大きな栄養になるのだと実感しました。キラキラしている利用者を見ておもわず「私たちがビューティーアップ講座を受けたい！」とうらやましがる女性職員が多数いました。この「ビューティーアップ講座」は、いつまでも美しくいたいという女心を封印して苦勞してきた女性たちが、改めて女性としての自分を取り戻す良い機会となりました。そして、女性としての心の豊かさを取り戻す事が、新しいステップへのきっかけになってくれるであろうことを期待しています。女性としての生き方をかなぐり捨てて一生懸命に生きてきた女性が、施設で生活しながら自分らしさを取り戻していくために、このような講座が必要であると考えます。この講座は、母子生活支援施設に入所している女性の福祉向上と美文化の向上に大きく貢献しています。

パソコンスキルアップのための「PCサークル」

埼玉県：児童養護施設「あゆみ学園」

養護部長 浜本慶浩

あゆみ学園のPCサークルは、入所児童のパソコンスキル向上と新たな自己表現の機会を提供することを目的に、社会人のボランティアグループNPO法人KIDS (<http://www.kids-npo.com/>) の支援を受



社会人ボランティアの指導のおかげでめきめき上達する子どもたち。「これからはパソコンぐらいできないとね」

けながら2000年より開始されました。

この活動を通して、セールスフォース・ドットコム社が主催するメディアフェスティバル(サンフランシスコ)に、我が園の中高生児童が、日本の児童養護施設で生活する子どもたちの日常を紹介した、3分間程度のポップでコミカルな映像作品を出品したところ賞を受賞しました。そして、アメリカで行われた授賞式に児童3名と職員1名が招待されました。子どもたちが作った映像作品がアメリカで賞をとったおかげで、子どもは自信を深め、帰国後はあゆみ学園のホームページ制作に携わることになりました。

施設で生活する子どもたちのインターネットの活用については、有害情報などの多くの憂慮すべき現実があります。しかし、今のインターネット社会を生きる子どもたちにとっては、目の前にある現実はずなわち未来でもあるのです。ネットの危険性と有効な活用方法について教えるのは、学校や社会ではなく、養育者である我々施設職員の責任ではないでしょうか。インターネットや携帯電話の正しい使用方法を身につけさせることが、子どもたちが施設を退所した後のより豊かな生活と自己表現に繋がると思います。

子どもたちの人生に彩を添える ～囲碁は、生涯を通して楽しめる趣味となる～

大阪府：情緒障害児短期治療施設「あゆみの丘」

児童指導員 田村 薫

あゆみの丘では、月に2回囲碁クラブが開かれています。子どもたちは、小学生から高校生が対象で囲碁に興味のある子どもなら誰でも参加することができ、日本棋院四段の方と初段の方2名の指導のもとで行われています。

囲碁クラブができたきっかけは、子どもたちの中で「ヒカル碁」という漫画が流行り、囲碁に興味を持ち始めた子どもがいて、指導できる職員がいたため囲碁クラブが誕生しました。初めは、集中力を持続できない子どもや負けると分かると悪ふざけをして勝負にならない子ども、寝転んで対局する子ども、走りまわる子ども、囲碁を玩具にして遊ぶ子ども、囲碁の時間中に暴言を言い続ける子どもなど囲碁を楽しむ場でなくなったため一旦、休部に追い込まれました。しかし、もう一度子どもたちを集め、ルール作りをして再スタートしました。すると、負けても囲碁に取り組むことのできる年長の子どもを目標にする子どもがでてきたり、ネガティブな感情をセーブしたりする子どもが増えてきました。また、



真剣に盤面を見つめる子どもたち。囲碁は子どもたちにたくさんのことを教えてくれました



負けると言って集中しきれなかった子どもが「もう一回やろう」と粘り強さを見せるようにもなりました。次第に碁の打ち方が理解できるようになってくると囲碁が面白くなり、真剣さが増し礼儀正しくなるなど子どもたちに変化が見られるようになりました。

生育環境の問題から入所児童の多くは囲碁などに限らず、文化的接点が乏しく、囲碁は相手の手を読んだり、先の見通しを自分で立て作戦を練ったりと、立ち止まって考える精神力を培うことができます。また、その場しのぎの反応をしがちな子どもたちに楽しみながら思考のトレーニングを行う事ができます。囲碁を行うことで、子どもたちが体得できる事柄をあげると以下の5つがあります。

- ①精神力を養う：落ち着きと集中力を育てる。
- ②大局と部局：盤面全体を見渡すことと、三手先をよむこと。
- ③守破離：定石から抜けて新しい手を考え、定石を超える。
- ④自信と友情：囲碁仲間と切磋琢磨する喜びを知る。
- ⑤失敗と展開：失敗をバネにもう一回チャレンジしようという気持ちが育つ。

こうして、子どもたちの生涯の趣味として囲碁を楽しむことができるようになり、人生に彩を添えてくれることを願っています。

子どもの文化財の多様な展開

宮城県：児童自立支援施設「さわらび学園」

技師 實石哲夫

宮城県さわらび学園は児童自立支援施設で、入所している児童は同じ敷地内に併設されている分教室に通いながら施設での生活を送っています。児童自立支援施設は自由に外出できる訳ではないので、児



子どもの経験領域を拡げよう、自信を持ってほしい。
その思いから始まったさわらび学園の行事への取り組み

童養護施設等との行事よりも、より「自信の回復」「経験領域の拡大」の意味合いが強いと思われます。

行事の主権により学園行事・分教室行事・子ども会行事に分かれます。

学園行事の中で継続性をもって行われるのはスポーツ活動です。男子は野球、女子はバドミントンを中心として行っています。男子は全国規模で行われる少年野球大会(中学生男子が9人そろえば地域の中総体にも参加します)、女子は中総体や新人戦を目標に練習しています。子どもが日頃の厳しい練習で身につけた技術や忍耐力は、外の世界でも通用するのか。その確認や成果の発表の場として、中総体や少年野球大会を位置づけて考えています。自分と同年代の子どもたちと真剣勝負をすることで、子どもたちは勝敗を超えた経験をします。

分教室行事は通常の学校行事にあたるもので、ほぼ小中学校で行われている行事は、分教室行事の中で行われています。特に分教室の美術で取り組んでいる「みのり」という陶芸の授業の時間では、粘土にふれて作品を作り上げていくことに大きな意味がありますが、作品を通じて、保護者との関係改善を図る糸口となる場合もあります。子どもから思いを込めた作品をもらおうと、保護者のうれしさはひとし

おです。子どもも入所期間が長くなるにつれ良い作品ができるようになり、成長を生活以外の場面でも確認することができます。

子ども会行事は子どもの代表者が中心となり職員のリフォロを受けて行事を運営します。子どもにとって、子ども会の役員になることは職員に生活が認められた一つの自信となるので積極的に役員になりたがる子どももいます。お花見・七夕・年忘れ子ども会では子ども会役員と職員が一緒になって、企画から運営まで作り上げていきます。

児童自立支援施設の行事は子どもの自信を回復していくことや経験領域の拡大を目的に行われます。入所している子どもによって自信を回復するのに必要な行事も違えば、子どもに経験させたいと思うことも違ってきます。生活でも同じ事はいえると思いますが、行事でもより丁寧な支援が必要になってきていると思います。

子どもが行事を通じて自信の回復や経験領域の拡大を図れるように、職員は子どものニーズに合わせて必要な行事の形を模索し続けていかなければと思います。

さいごに

ここに紹介した取り組みは、全国の施設で行われている文化活動のほんの一例に過ぎません。近年、子どもの問題が深刻化する中、愛情やぬくもりだけでは対応しきれない子どもたちが増えてきました。施設入所に至る児童の多くは、大人から適切な養育が受けられない環境の中で育ってきました。自分たちが幸せに生きていくために必要な社会スキルを学ぶ機会もなく、愛着関係が築けず暴力行為や自傷行為などによって自分を表現しようとする児童が多く、それに伴い施設では、処遇困難なケースの対応

と児童のケアに追われる日々が続いています。

文化とは人が、生活を営む上で必要とされる社会的行動や行動様式の積み上げの上に成り立つもので、これらすべての原理が文化であります。しかし、現代社会においては、複雑な社会構造のため文化構造も大変複雑で多様なものになりました。特に先進技術が作り上げたバーチャルリアリティーの世界では、文化性の価値や意義が問われなくなってしまい、文化の伝承が難しくなりました。バーチャルリアリティーの世界は、リアリティーの世界にしか存在し得ない「他者」の痛みや苦しみへの共感や、想像力といった感性が欠落しています。その結果、子どもがますます困難な課題や負の文化を背負い込んでしまっています。我々大人は、施設の日々の文化活動をとおして、次世代に繋ぐ良質な文化を子どもたちに伝承しなければなりません。

キーワード：ユニットケア

ユニットケアとは、児童養護施設の施設の生活単位を言う。定員は12名以下の小規模集団をいう。ユニットケアの特徴は、独立家屋ではないが、居住スペースとその機能が各ユニット毎に設備されている。大舎制の形態に比べると個別ケアが行いやすい利点がある。小規模ケアの流れの中にあつて施設の形態をユニットケアにする施設が増えている。



子ども文化財の多様な展開

台本の中に飛び込んで遊ぼう！

—子ども達といっしょに20年、そしてこれからも…



たかやせいじ
児童劇演出家 高谷静治

はじめにお断りしておきますが、私は学者でも、研究者でもありません。舞台が好きで、気がついたら40年も舞台に関わる仕事を続けてきました。そんな私がいつの間にか子ども達と一緒にオペレッタを創るようになって20年、いろんなことがありました。毎回30名ほどの子ども達が参加して20年でずからその延べ人数は数百名になります。そして初期の子ども達はお父さん、お母さんになり、いまやその子ども達の子どもがこのオペレッタに参加しています。演出というより取りまとめ役の自分を含め、スタッフは変わりません。もはや高齢者ですが年に一回の子ども達との共同作業を楽しみにして、稽古場や劇場では輝いた顔で子ども達と接しています。そんな現場から感じた子ども達、子どもの文化などを書きつらねたいと思います。

●演劇との出会い

戦後10年余くらいだったと思います。春未だ浅い津軽に劇団がやってきました。演劇や劇団という呼び名も知らなかった中学生には興味津々たるものがあります。授業の合間々に、仕込みをしている講堂に駆けつけその様子を見ていました。光を一杯採り入れていた窓に黒い布がかけられ次第に講堂の中は暗闇になっていく様になにか興奮したものです。

今にして思えばハレとケの原点に立ち会ったので

しょうか？ そして夕方、チョッピリおしゃれた姉に連れられ生のお芝居を初めて観ました。マルシヤークの「森は生きている」でした。主人公がいじめられていることに泣き、動物たちの会話に喜び、そして何よりも感動したのは一瞬にして雪景色が春の花畑に変わる仕掛けでした。興奮でその夜は眠れなかったのが僕の演劇、舞台活動の出発点だと思います。

昭和30年代前半、まだ高度成長期の前です。東京青森間が列車で20時間もかかった時代に演劇活動や音楽活動がすでに全国的な展開をしていたことに驚きます。まさにどんな戦禍や災禍にあっても畑を耕すことと豊穡への祈念から生まれた音楽、劇、踊りなど文化は真っ先に再生するという証です。

●文化って何だろう

「身土不二」という言葉があります。〈身体と土は二つのものではない〉という意味で、人は土を耕し、土の恵を得て、土に還るといふ。この言葉を知ったのはそんなに古いことではありません。海も空もみんな土とつながっていて私たちは土なしには生きられないということを実感するようになったのは最近です。また、フランス語では文化(culture)と土を耕す(culture)ことが同義語だそうですね。

人は土と共に生き土からの恵を食するように、人

は文化と共に生き文化の恵を受け取るのです。戦乱や天災に、瓦礫とともに生き残った人間は、まず土を耕し、そして劇場など人の集まる空間を再興し、踊りや歌が息を吹き返します。そこでは途絶えていた祝祭が息を吹き返し、さまざまな文化、芸能が再び花開きます。まさに〈子どもと共に文化を遊ぶ〉というのはこのように土を耕し、土の恵を次の時代に手渡していくのが役目かと思えます。

ダンスの世界ではいまフェスティバルが大きくなりとして世界各地で誕生しています。南米に、アフリカに、中東にダンスフェスティバルが生まれています。これらは戦災や動乱による疲弊した土壌(文化)を耕してきた結果、再び実をつけ始めたからだと思えます。そこのダンスには時代を映しこんだ見事な果実がたわわに実り始めました。耕すことをやめて果実を食するだけの土地はやがて枯れます。文化を育てるといのはまさに土を耕し続けることだと思えます。

さて、前書きが長くなりました。2010年のオペレッタ初日までの日記から抜粋です。子ども達との悪戦苦闘と遊びの発見。

2009年11月8日

稽古初日。二ヶ月間(基本的には平日)夕方6時からのワークショップは柔軟体操、発声、歌の後に芝居の稽古にとりかかるといメニューは変わらない。学校、宿題、塾、習い事などで寝る間もないけれど、身体を動かすこと、声をだすことを人前でやってみたいという子ども達が、固い決心のもと今年も32人集まった。今日は最初の顔合わせとして今回の台本の基本的なコンセプトである万物共生・循環について子ども達と話し合うことにする。これは今回の台本作者が木村秋則氏の記録に触発されて書き上げたことによる。

「リンゴの木は、リンゴの木だけで生きていくわけではない。周りの自然の中で、生かされている生き物なわけだ。人間もそうなんだよ。人間はそのことを忘れてしまって、自分独りで生きていていると思っている」(木村秋則)

このことを子ども達と大人のスタッフと皆で討論した。はじめに「芋虫、青虫、毛虫が好きなの、または気にならない人」という質問にはほぼ全員が拒絶したが、古希にならんとする映像のスタッフFさんだけが蚕を飼った経験や、海外ロケで巨大芋虫に触った経験などを話し「何の悪さもしないし、慣れれば可愛いものだよ」と発言。小学校4年C君「じゃあ、芋虫や青虫、毛虫は何のために生きているの?」。

「何のために生きている? というのは難しい質問だけど、人間も何のために生きているのか? その答えは誰も解らないと思う。ただ芋虫たちも人間もあらゆるものと一緒に生きているということだ。だれが決めた訳ではないけれど芋虫たちはやがて蝶になり、様々な花の花粉を運んで受粉させその花や植物の繁殖を助けているんだ」と、僕は自信なさげに発言。というのは、子ども達には秘密にしているが僕はまったく虫に弱く、トンボや蟬にすら触れないのだ。特に、蛾や毛虫に弱く、遭遇すると鳥肌がたってしまうほどである。

今日は芝居創りの出発日だから今回のテーマである万物の共生、循環について子ども達が考えていることを徹底して話してもらおう。みんながひとしきり虫たちについて自分の体験から思うことを話したが虫たちとの共生についてはまだまだ理解を得られないようだ。曰く「虫を発見したら、殺虫剤をかける 割り箸でつまんで焚き火の中に捨てる 水の中に沈める カラスなど鳥の餌にする」などなど次々

に駆除する方法が発表される。そんな中でいつも口数の少ないS子が「消極的かもしれないけど割り箸でつまんで他の場所(木)に移してあげたら良いんじゃない?芋虫だって生きてるんだからさ」。「オーッ」と一同。「今日は稽古にならなかったけど、芝居に対する取っ掛かりとしてみんなの考えが聞けてよかった。今日家に帰ったらお父さん、お母さんともこの話をしてください。なにか新しい発見があるかも知れない」。

2009年12月4日

エコ、環境、省エネ、もったいない精神、万物の共生、循環などのフリートークはおおよそ二週間毎日続けられたが子ども達の発想が自由に飛び回らなくなってきたので自作のショートショートを読み聞かせる。

ショートショート①

「海賊になりそこねたお話」

ぼくが子どもの頃はいまみたいに受験に追われることもなかったのでひたすら遊んでいました。いまみたいに遊び方なんて誰も教えてくれなかったので皆が工夫していろいろな遊びを考えました。この悪がき仲間にとって共通のデビルであった説教魔の林檎屋のおばさんに対するいたずらなどはあまりにも沢山のバリエーションがあってとてもここでは書けないがともかく草一本、石ころ一つ、トンボが一匹と何でも遊びの道具に早変わり。そんな北国のハナタレ達を夢中にさせたのは当時大流行したアメリカ映画の海賊ものである。夏になると近寄ってはいけなと言われていた沼へ集まって丸太の船にまたがって海賊ゴッコ。お姉さんが大事にしているスカーフを頭に巻いてボール紙の片目パッ

チをすればもうすっかり海賊気分。ぼくはフック船長やジョンシルバーになりたかったのだけどガキ大将はいつも却下。なぜなら衣裳がスカーフとボール紙の目パッチだけではせいぜい海賊の子分どまりなのだ。どこから引っ張り出してきたのか?ボロではあるがフロックコートや皇族が冠るような帽子を持ってきたやつが主役を手にしたのは言うまでもない。ただし、それらが水浸しになり、泥だらけになったことでどれほど両親や、お爺さん、お婆さんに叱られたかは知らない。それから気が遠くなるほど時間が過ぎたというのに時々思い出す。「あの時、親戚のおばさんが質屋をしていたので学芸会で使うとかんとか言ってフロックコートを借りればよかった。そうしたら海賊の大将をやらせてもらえたかも知れない」などと思いながらアルコールゼロのビールをゴクリ。

ショートショート②

「猫は死ぬまでに一回だけニンゲン語を話すらしい」

(家内の!)熊部屋にはクマぬいぐるみとクマグッズが1000点くらいとクマ関連絵本が500冊ほどであふれている。小春日和。この部屋のクマソファに寝そべって本を読んでいた。すると誰かが遠慮がちにドアをノックしています。あわててドアを開けるとそこにはわが家の肥満猫ドリーがいました。

「ここは猫部屋ではないよ。お母さんに怒られるから下りなさい!」と階下に追い返しました。そしてしばらく本に夢中になっているとまた、ノックがします。「ここはクマさんの部屋だと言ったよ!」と、ドアを開けたら、クマのプーさんのような耳と鼻をつけたドリーが「私もクマ



写真提供：こどもの城 撮影：國田 茂
「タントさんのふしぎなレストラン〜タントさんといじわるいもむし〜」より

「なりたい」と、確かにニンゲン語で言いました。絶対に夢ではなかったと思うけど、よくわかりません。確かなのはそれから三ヶ月後にドリーは陽だまりでひっそり息を引き取りました。

2009年12月29日

「もっと大きな声を出す！ もっと身体を自由に動かす！ 表情をはっきりと表す！ 君たちはテレビに出てくる子ども達のように大人に作られた歌や芝居をしては駄目だ！ この二ヶ月いろんな事をフリートークしてきたこと、いろんな遊びを皆で考えたことなどをおもいだしてごらん。そうして今回の台本の中に飛び込んで遊ぶ。毎日変わっても良いし、このまま1月3日の初日を迎えても良いけれど、身体を解放してあげると頭の中もフレッシュになるか

ら年末年始の4日間の休みも身体の解放を忘れないように！」と恒例のどなり納め。

●文化の苗を手渡す

こうして20年が経過しました。若いオペラ歌手と子ども達と同じ目線でオペレッタを創ろうというのは無謀な試みだったと思います。でも現在まで世代を次いで続けられていることに感謝しています。

20年前にゴムマリのように身体が弾んで劇中を遊んでいたFさんは大勢の子どもバレリーナに囲まれて幸せそうです。10年前、おじいちゃんに連れられて参加していたTさんは最近ニキビが出来てきた。なんと言っても手足が一緒にうごいてしまうMくんはまるでカモシカのようにスタジオを駆けるようになった。Kちゃんと手をつないでいたNくんは、今ではどんな小さな女の子とも手をつなごうとしない。そしてそのKちゃんは長い髪をキラリと輝かせる少女になった。

こうして時は巡り、また新しい泣き虫、はにかみやさん達が怒涛のように舞台を駆け抜ける。そう、舞台(人生)はまるでロンド。

今年も確かに子ども達へ文化の苗を手渡しました。葉が大きくなったら芋虫さんにも少し分けてあげてください。

キーワード：身土不二

もとは仏教用語で「身」（今までの行為の結果）と「土」（身がよりどころとしている環境）は切り離せない、という意味らしいが、その後この言葉は食運動や産地消運動の原則として広く使われて、現在ではスローフード運動などでも紹介されている。ただし、仏典にあるこの言葉は運動団体や、時代、国によって恣意的に使われているようで、たとえば韓国の農協で国産品愛好のスローガンとして使っている例ではこの言葉を「中国の伝統」「韓国の伝統」などと、語源をあいまいにしているようだ。

子ども文化財の多様な展開

ああ、マハヤナで過ごした日々は楽しかった！

—子どもたちにそう言わせたい。その思いから演劇コンクールは始まった！



よしざわじゅいちろう
マハヤナ学園撫子園 前副園長 吉澤寿一郎

「先生、ゲキレンやろ、ゲキレンやろ」

「ゲキレン」とは劇の練習のこと。マハヤナ学園撫子園では毎年11月になると、子どもたちからこんな声がかかります。12月末に毎年行われるクリスマス恒例「演劇コンクール」での優勝トロフィー獲得をめざして。

でも、劇の台本を用意するのは職員の仕事です。学校用に市販されている台本の多くはクラス全員の配役と台詞を用意するためか、どこか不自然で面白くありません。園での上演にもじっくり来ず、何より種類が少ない。そのため、民話や落語、漫才にまで題材を広げ、東京中を探して歩きます。これだろう？ これ、これだ！ いやこれはちょっと…、と子どもたちの顔を思い浮かべながら。オリジナルのものをゼロから書き起こすこともしばしばです。

ひとたび台本を決めてからも、配役の子どもに無理のないように台詞を変えたり脚色しなおしたり、と手を加えます。年をまたいで同じ劇を演じる場合でも、新たな配役に合わせてアレンジします。衣装は浅草に出かけて調達、背景となる絵は古いシートに描きます。小道具も全部職員の手作りです。

ですから、夏のころからせせと準備しなければなりません。そうと分かっている、恒例の一大イベント、サマーキャンプ(後述)に始まり、サイクリング、ハイキングと行事続きで思うようにはか

どりません。

昨年、発達障がいの子どもの自分も漫才したい、台詞覚えるから、というので5分ほどのものを作ってあげました。あまり上手にはできなかったのですが、すると「今年をもっとうまくやるから、自分用にまた作ってくれ」と言うのです。こんな嬉しい予期せぬオーダーもあつたりで、職員たちの台本を巡る右往左往は、毎年お決まりのパターンとなっています。

ところが今年、これも予期せぬ例外が一つできたのです。高3の子どもの、先生、見てくれと自分で作ったオリジナル台本を持ってきました。表紙はこれまでにない写真入り、私たちが作ったのよりずっとカッコいい。パソコンで作ったようです。タイトルは「子別れ」、主演・監督はその子になっていました。その子は小6の時、園に来て初めて落語の「子別れ」を演じたのですが、何か強い思い入れがあったのでしょうか。なかなかの力作で目を細めて読みました。来春には卒園していく子どもです。

喜劇王チャップリンは「今までの最高傑作は？」と聞かれて答えます。「Next One！」(次の作品だ！)。この心意気だ！ 演劇コンクールもこれで行くぞ！ 職員の号令のもと、子どもたちは、今日は昨日より明日は今日より、今年より去年より来年は今年よりもっと上手に、とゲキレンに走り出します。



小6で入団して初めて演じた「子別れ」の台本(右)。高3になって自分で書いたオリジナル「子別れ」の台本(左)。

本番が近づくにつれ熱を帯び、自分たちの遊び時間を返上してまでも「ゲキレンやろ」と言い出します。12月アタマに少し中だるみがきます。「そんなじゃダメだ、今年は棄権しよう」と持ちかけても、ここまでやったのだからとみんなで話し合い「やっぱりやる」と言います。中高生は期末試験と重なるため十分な練習時間を確保するのが難しいのですが、それでも夜の11時頃から自主的にゲキレンしています。

演技の出来不出来ではありません。子どもたちの多くは、人情の機微—人の持つ可笑しさ、愚かしさ、哀しさ、他者を愛し他者に愛されるといったことに、年齢的に、そしておそらく境遇的に、不慣れで十分に理解することができません。そういう感情があること自体に戸惑いを露わす子どももいます。理解したつもりでも、自分で受けとめるだけで精一杯、ましてそれを舞台上で表現するなど…。でも、「Next One!」の心意気! 彼らは一生懸命、繰り返し繰り返しコンクールに向けてゲキレンします。

演劇というのは不思議なものです。配役上は主役は一人ですが、子どもにとって演じている時は「自分が主役」なのです。毎年毎年やるものだから演じる喜びが体に染みついています。自信が満ち満ちています。これは、演劇を見る、という受身では得られないことです。自分で演ずる、自分が演じる、そ

の「主人公」になりきってもっと上手に—。ゲキレンしていると周りの台詞も覚えてきます。ここをこうしたら、と隣の子の役に「自分が主役」になったつもりで、アドバイスしたりし始めます。そういう切磋琢磨を経て、劇の完成度は高まっています。

ある少し乱暴な子どもがいました。「ベロ出しチョンマ」—妹のしもやけの手当をする時、“ベロ出しチョンマ”の作り顔して妹の痛みを和らげようとする、妹思いの兄が主人公の劇です。結末は一家磔刑に処せられるのですが、その場でも兄は妹のために“ベロ出しチョンマ”をします。彼は、その主人公を演じてから年下の子どもに優しくなりました。演劇にはそんな不思議な力があるようです。ですから、演技の出来不出来ではないのです。情愛の表現は苦手でも、繰り返し繰り返し演ずることで、情愛が心に涵養されていきます。

やっただ先生!

ゲキレンをがんばった子、上手に演技できた子どもたちには、コンクールの終わりに演技賞としてメダルをあげています。ほとんどの子どもがもらい、ベッドの横に大切に飾ってはその数を競っています。中には貰えない子どももいます。ある年のA君は、ゲキレンに不熱心だったので貰えませんでした。本番ではうまくやれたのに。思わず会場で大泣きしていましたが、悔しさは“飛躍のジャンプ台”です。その翌年「リベンジだぞ」と発破をかけられた途端、コンチクショーとゲキレンに打ち込み、見事、特異な言い回しの落語「恋の山手線」を演じきりました。そして念願のメダル獲得。A君の、そしてほかの子どもたちも、メダルを首にかけられた時の嬉しそうな顔といったらありません。緊張が解けてほっとして、そしてメダルを手に胸を張ります。やっただ先生! そんな声が聞こえてきそうです。会



平成17年演劇コンクールより

場には後援会の方々や卒園生、ボランティア、フレンドホームの方々が集まり、盛大な拍手を送ってくれます。その時の子どもたちの晴れ晴れしい顔。そして、その後の会食会で、自分たちで作った料理やケーキを配膳しお客様と共に楽しむのですが、一人一人が上手だったネと褒められます。“家庭”をあまり知らず褒められたことのなかった子どもたちが、たくさんの大人たちに褒められるのです。ああ始めてよかった、続けてよかった。テレながらも誇らしげな子どもたちの顔を見るたびに、そう思うのです。—そして、決まって30年前の撫子園の様子が目に浮かびます。

遠き道のり

人は誰しも、人生の節目節目で過去を振り返るものです。撫子園の子どもたちは様々な事情から“家庭”というものを知らなかったり、理解しかねたりしています。多くの子どもたちが、私たちの窺いしれない深い闇を背負わされています。そんな子どもたちにも、せめて「ああ、マハヤナで過ごした日々は楽しかった」と言わせてあげようじゃないか、誰にでも「自分が主役」と思えるような日々がある、

そんな一世風靡した日々をマハヤナで体験させよう、それが私ども職員の目標だ、という決意から私たちのさまざまな挑戦は始まりました。その成果の一つが、演劇コンクールです。しかし、ここに至るまでの道のりは遠く大変なものでした。

およそ30年前、私が赴任した昭和54年当時から60年代頃まで撫子園は荒れに荒れておりました。小学生たちは、中学生とすれ違いざまに「ガン飛ばすんじゃねえよ」と殴られ、わずかなお小遣いを巻き上げられる。万引きもさせられる。「俺たちがやられてきた事をやってやるよ」。その子どもは年少の子に同様のことを、その子もさらに年少の子に…暴力の連鎖はとまりません。集団リンチもありました。特殊学級(特別支援学級)の子どもにも容赦なく「特殊バカ!」と暴力が振るわれます。小学生たちは生きた心地がしなかったでしょう。耐えきれず下校時にランドセルを捨て脱走、そして警察に保護される、この繰り返しでした。

その暴力の連鎖を止めるべき職員も暴力の対象になっておりました。保母さんに蹴りを入れる「○○ちゃんキック」ごっこが流行っていたほどです。意欲的な新人職員も、前面の暴力中学生と後面の暴力

を放置してきた先輩職員との狭間で展望が持てず、辞めていきます。すべてが閉塞状態の中にありました。

「先生はいいよね、いつでも辞められるんだから」

ある日、園を去る職員の背中に小学生が言い放ちます。

「先生はいいよね、いつでも辞められるんだから。私たちは卒園するまでここに居るしかないのよ」と。

職員の誰一人この言葉に向き合うことができませぬ。しかし、この言葉を契機に、園内革命が始まったのです。

「日曜日でも学校があればいいのに。だっていじめられないもん」という子どももいました。子どもたちはひとときの楽しみも一片の夢も持てないままに放置されていたのです。そして、職員は子どもたちからすでに見放されておりました。まずは、子どもたちに信頼されることから始めなければ。

私は入所してすぐに、職員有志による「泣く会」を発足しました。誰も子どもたちの現状に本気で泣いてやっていないじゃないか。本当に泣く気があれば、改善行動に結び付くはずだ！ そして、私はその手段を「遊び」に求めたのです。

その夏、私は賭けに出ます。園を支配していた暴力中学生8人を率い、伊豆半島横断を決行したのです。しぶしぶの体だった彼らも私の挑発と励ましによって全員が完走。重いリュックを背負いながら自力で困難を克服したのです。その夜、一人の子どもが露天風呂に浸かりながらこう言いました。「先生、電車で来るにはどこをかって来ればいいんだあ。この温泉が気に入った。…俺もいつかは結婚する。そうしたら女房を連れて来たい。子どもが生まれたら3人で来たいから」。小さな兆しが見え始めました。

テレビをなくしてしまおう！という無茶なことも

始めました。日課を壊すから、という同じ理由で枕元のスタンドやラジカセもとりあげます。「子どもたちは、トランプやオセロをしたりお話に興じています。子ども同士で、あるいは保母や指導員を引っ張り込んで」。「室内ゲームをやめさせて、戸外で遊ばせよう、職員も一緒に。怪我の一つや二つは屁のかっぱ」。「『今、一番欲しいものは？』。小学生5人に聞きました。そしたら全員が『自転車！』と答えたのです。『テレビは見たくないの？』『時々、好きなだけ見た方が面白いよ』」。「抗議覚悟で奪ったテレビでしたが、テレビ獲得の動きが出てきません。しかもどの子どもも伸び伸びしているというのは、一体どういうことだろう。生活とは創るものだ、という言葉の意味がわかるような気がする」。これは、一緒にこの暴挙に出た職員たちの言葉です。

「耳搔きの日」、そしてサマーキャンプ

園が変わり始めました。でも少しずつ、ほんの少しずつです。保母さんが、小さい子どもを膝にのせてダッコしようものなら、「甘ったれるんじゃねえよ」と年長者から横やりが入ります。その子ども自身が甘えてかまってもらおうという経験がないのです。年長者の暴力が怖くて小さな子は保母さんに近寄ろうとしません。

でも、「甘えの追体験」は必要です。スキンシップを図りました。すもう、手つなぎ鬼ごっこ、長うま…職員と子どもたちが汗まみれ、どろんこまみれで遊びまくります。「やれることは何でもやろう、とにかく子どもにかまってかまってかまい倒そう」が合い言葉です。学校にかけあい、子どもの情緒安定を図るから宿題はしばらくご勘弁をとお願ひしました。その分、子どもと遊び、子どもにかまうのです。

「耳搔きの日」も設けました。小学高学年から低

学年へとひろげました。ひざ枕させて。これなら「甘ったれるんじゃねえよ」と年少の子にスゴむことはできません。我先にと順番待ちとなりました。中にはどうしても逃げを決め込む年長者もいますが、「お前の耳は汚いんだよ、ほらあ」と羽交い締めにして半ば強制的に。でも、「こら、動くな。こら」の声の下で子どもはくすぐったさと嬉しさをこらえているようでした。そんな何気ない生活を通して、子どもたちとの距離は少しずつ縮まってきました。いつしか、子どもたちが生活の中で自然に笑顔が出るような園にしよう、が職員たちの共通の目標になりました。

前後して、このスキンシップを図るという目的をさらに発展させたのがサマーキャンプです。前述の「暴力中学生8人との伊豆半島横断」で手応えを感じておりました。夏休みに10日から2週間ほど、山や海に行き、遊びに遊びます。「マハヤナで過ごした日々は楽しかった」——一世を風靡した思い出作りに、朝から晩までとにかく遊びまわります。海では海水浴はしません。もっぱら飛び込み。ロープにぶら下がり海中ヘドブーン。高い堤防や橋からオソルオソルコワゴワ、ドブーン。東京では体験できないことをわざと選んで遊びます。山では虫取りに、ターザンごっこに明け暮れます。肝試しも恒例です。でも肝試しとは明かしません。散歩に行こうかと何気なく誘い出したその先には、職員が先回りしてチョーチンババアやシイタケババアになって待ち受けます。グラウンドの真ん中に予め穴を掘っておいてそこからスーッと出る。あまりのリアルさ(?)によその人が腰を抜きパトカーが出動、職員が平謝りという一幕もありましたが…。とにかく朝から晩まで遊びっぱなし、夜はみんなでシユラフにくるまって満天の星を…いえいえ、その前に全員バタンキューです。

子どもたちが職員に話しかけます。あれ楽しかった、これ最高だったと。以前よりもっともっと甘えてきます。「〇〇ちゃん、いい加減にして」は禁句です。子どもは独占しがります。どんどん、子どもたちとの距離が縮まってきます。「叱り」が子どもたちに届くようになります。自分の「居場所」となる保母さんを見出した子どもは安定します。部屋替え、担当替えがあっても、自分の慕っている保母さんの許へ自由に出入りします。「疑似親子」に変わりはありませんが、本当の親子に限りなく近い「極似親子」になっていったのです。

「日曜にも学校があればいいのに」。そんなセリフを吐く子どもはもういません。どの子どもたちも保母さんや指導員に十分に甘えています。

そして、演劇コンクール

話は戻ります。私が撫子園に赴任した当時、園ではクリスマスに特別な行事は行っておりませんでした。ご寄贈いただいたアイスクリームやケーキをみんなで食べるぐらい。そこで、自分の担当するフロアだけでも何かやろうと、ゲーム大会やなぞなぞ大会を始めました。やがて、それが寸劇を始めることになり、それならと学校の先生を招待し、劇の終わった後にはみんなで作った料理やケーキを囲んで先生たちと食事会を楽しみました。

すると他のフロアの子どもたちも見たい、参加したいと言いだし、それなら一緒にやろうということになったのです。3年目の時です。消極的だった職員も腰をあげずにはおれません。これがやがて演劇コンクール&会食会となるのですが、実はもう一つ下敷きがあります。

以前、私は自身の病気療養を兼ね香川県の児童養護施設に勤めておりました。そこで、クリスマスに小学生を集めて「親捨て」という劇を行ったことが

あります。わずか18分ほどの短いものでしたが、終演後、見に来られた学校の先生が私の手を握りこう言うのです。「私は間違っていた。学園の子どもがこんな立派な劇をやるとは思わなかった」と。それからしばらく経って、その先生から学校の学習発表会に出てあの劇を演じてほしい、と要請がありました。大勢の先生方や、お父さん、お母さん、お爺ちゃん、お婆ちゃんを前にしての演技です。うまくいくだろうか、と不安しきりでしたが、終演後の会場のお客様の顔には涙が溢れていたのです。それから、地域の人たちの施設を見る目が変わったのは。周りは農家でしたが、そこから届けてもらう大根やトマトが食卓を彩るようになりました。そして、何よりも嬉しかったのは、後年の話ですが、その「親捨て」を演じた主人公が21歳になった時、私に告げたのです。「僕はあの劇忘れない。一生の思い出だ」と。

この体験が演劇コンクールの、そして子どもたちが人生を振り返る時、せめて「マハヤナで過ごした日々は楽しかった」と思えるようにしたいという願いの原点となったことは言うまでもありません。夏のサマーキャンプから年末の演劇コンクールまでの5カ月間、子どもたちと一緒に走り続ける、息が切れるまで。子どもたちの汗と鼓動を身近に感じながら。子どもたちに楽しかったと言わせたい、その一心で。

遊んでばかりでいいの？の苦言・忠告はありましたが、聞こえぬふりをして…。

変わり始めた子どもたち

撫子園の子どもたちは明らかに変わりました。子どもですからけんかはありません。自己主張・自己表現の表れ、けんかは“成長の促進剤”です。でも、暴力・いじめはありません。年長者は年少者を気遣

い、その世話をするようになりました。「極似家族」の兄弟姉妹になったのです。サマーキャンプや演劇コンクールを毎年経るたびに、子どもたちは逞しく成長していきます。声が大きくなり、挨拶がきちんとしてできるようになりました。

学習面でも変化が表れました。

職員たちは一人でも多く高校に行かせたいと強く願っています。しかし園内が荒れていたころは、子どもたちの情緒安定を図ること、つまり“遊び”で手一杯。決められた学習時間に予習復習に付き添いますが、生活指導や個々の出来事の対応に追われ、余裕がありませんでした。職員も子どもたちも。「高校進学が全てではない」「学力不足は、入所以前の家庭環境に起因している」という逃げの気持ちも職員にあったのも事実です。

成績優秀でハイレベルの都立高校に合格したH君は、進学せず就職の道を選びました。「早くここから出たいから就職します。ただ、高校に行けないから就職するんじゃないってことを証明したかった」。それが彼の本心だったのかはわかりませんが、園内暴力が遠因にあったことは確かです。もう少し早く園内改革が実現していれば、H君のような子どもを出さずにすんだのかも知れません。

私たちは学習面での改革に着手しました。子どもたちとは、“心のつながり”(信頼)ができています。サマーキャンプや演劇コンクールを通して、子どもと職員は同じ感動で結ばれています。今ならやれる、との思いがありました。

まず「学力不足は、入所以前の家庭環境に起因している」ことの検証から始めました。すると、小学年低学年に入所した子どもより高学年で入所した子どもの方が、中学生になった時の成績が良く、進学が多いことが判ったのです。このことから「学力不足は園自体の指導不足によるもの」であることを職

員全員が正視し、「基礎学力養成学習」をスタートさせました。

別な取り組みも始めました。「おたくの子さえいなければ」。学校の一部の先生は半ば公然と口にします。撫子園は地域から遊離しては存在しえません。職員の中には「園内部にだけ目を注いでよいのだろうか」の危惧を懐いている者も多くおりました。それなら「地域の子どもも一緒に面倒見てやろう」と始まったのが「りんご塾」です。隣人の「隣」と養護の「護」から命名したのですが、単なる補習塾ではありません。勉強を通して自分たちの可能性を見出してほしいの思いから、勉強に不熱心な子どもに「大人になったらゲンコツよりアタマだ」と指導しました。

このりんご塾に集まった地域の中学生数人を中心メンバーに演劇を行ったこともあります。演目は「りんご裁判」。見学にいらしていた学校の先生のすすめで学校でも発表することになりましたが、その上演中だけは、それまでザワめいていた会場がシーンと静まり返ったそうです。

その後りんご塾は進化し、今では子どもが自発的に「青りんごの会」(小学生)、「姫りんごの会」(女子)とグループを結成、一緒に遊ぶだけでなく、難しい問題を一緒に解いたり、互いに教え合ったり、という風景が日常のものとなっています。

地域の目も変わりました。「やっぱり園の子どもは」が「さすが園の子どもは」になったのです。園にすることを隠したがっていた子どもも、園にすることを誇りにしているような素振りを見せ始めました。

夢を持っていいんだね

大きな車輪が動き始めました。きしみながらも、

確実に前へ。

勉強にかける子どもたちの意欲が変わり始めました。目が輝いています。園での学習は、職員と子どもとのマンツーマンです。一斉授業形式では遅れていた子はさらに遅れてしまいます。当然、職員への負荷は重くなります。“遊び”もあります。でも、「2」だった子が半年もせずに「3」になり、やがて「4」や「5」さえ貰う子が現れます。大きな励みです。職員もうかうかしてられません。あの、大変な台本作業も迫っています。

園に一体感が生まれました。演技指導の苦手な職員、スポーツが苦手な職員は互いに、あるいは周りの職員の手助けを得ながら、全員が同じ方向を向いています。子どもたちも互いを気遣いながら、小学生は職員や年長者のもたらすあふれる安心感の中で平穩に暮らしています。中学生は「自分は何になりたい」と夢を語り、高校生は「どの大学に進み何を学びたい」と具体的に目標を定めています。生活そのものにはっきりと目標を持った子が続々と現れてきました。

平成10年頃になると、ほとんどの子どもが高校



毎年少しずつ改良されていった演劇「一杯のかけそば」。その台本は手あかで汚れ古びても、演じた子どもたちの思いや汗、夢と希望はいつまでも色あせることはない。



平成21年演劇コンクールより

へ進学を果たすようになりました。以前は、進学しても学力不足から中退してしまうケースがありましたが、今は中退者はゼロです。卒園生のうち何人かは短大を出て、知的障害者施設などに就職しています。4年制大学に進学する子どもも現れました。

この平成10年に高校へ進学した子どもたちは、高校3年間、演劇コンクールでは一つの劇「一杯のかけそば」にこだわりました。どこへ出しても恥づかしくないほどのすばらしい出来なのですが、それでも毎年毎年自分たちで少しずつ工夫を加えます。小5の時、ジュウシマツのヒナを寒いからとお布団の中に入れて死なせてしまって泣いていた、心優しい子どもたちです。この子どもたちが中3になるまでに暴力が無くならなければ園を去ろうと私に決意させた子どもたちです。そして、迎えた高3のクリスマス。その子どもたちが演じた園最後の、最高の晴れ舞台。…私は惜しめない拍手を送りました。そして、この子どもたちも「サマーキャンプと演劇コンクールは一生忘れない」の言葉を残して巣立っていきました。

「夢を持っていいんだね」「もちろんさあ。で、何になりたいの?」。そんな、普通の家庭では当た

り前の会話が園でも交わされています。子どもたちが生活の中で自然と笑顔が出る園になったのです。

そして—今年もまもなく11月。「先生、ゲキレンやろ、ゲキレンやろ」「ああ、待ってくれ。台本まだなんだ」「だめだよー」のワンパターンが園のあちこちで始まっています。

(平成21年10月)

キーワード：マハヤナ学園

マハヤナとは、古代インドの梵語『Maha-(大きい)-Yana(乗物)』のこと。大きい乗物に一切万有を乗せ、仏智、慈悲の彼岸に運んでいくことを意味し、マハヤナ学園の創立の精神である大乘仏教の理念を表しています。この理念のもと、自己の存在が自覚されたとき、社会の恩に対する感謝の心が生じ、受けた恩に報いる「報恩」の行として他者を愛し、他者と積極的にかかわるといふ当園の社会福祉事業は成り立っています。つまり、人に生かされ(感恩)、人を生かして生きる(奉仕)の「感恩奉仕」の精神を根本としています。大正8年創立。創立者・長谷川良信は著書「社会事業とは何ぞや」の中で、仏者の行う社会事業は「for him(彼のために)」ではなく「together with him(彼とともに)」でなければならないと述べています。

子ども文化財の多様な展開

青二祭で青春ばく進中！

— 首都圏の高校生 300 人が作る
学校の枠を超えた文化祭

エフエム世田谷ハイスクール Hot パーティー ディレクター、青二祭代表



やしまえつこ
矢島悦子

1998年7月、エフエム世田谷が開局し小学生から中学生、大学生、社会人に至るまで地元の方達が参加する、地域に根付いた番組が数多く作られました。

その中の1つ、「ハイスクール Hot パーティー」という高校生番組は司会、機材スタッフ、そしてゲストもリスナーも高校生という一風変わった番組です。ゲストは、主に司会やスタッフの友人、世田谷区の児童館ライブや夏の区民祭りなどに出演したバンド等で、放送から1年経つ頃には小さいながらも世田谷区の音楽好きな高校生ネットワークが出来上がっていました。

せっかくなので番組発のイベントを行おう！ということで2000年3月、成城の砦区民会館を借りて第一回青二祭開催と相成りました。実行委員約30名、バンド15組、弾き語り2組、ダンス2組、お笑

い2組、討論会など全て高校生による学校の枠を超えたお祭りは、朝から夕方まで約8時間にわたり行われ、大いに盛り上がりました。

イベントをやろう！といっても、ゼロからの出発なので当初はさすがに高校生が自主的に動くことはありませんでした。実際はイベントの高校生スタッフ探し、出演者探し、会場決め、音響機材調達、会議室の確保、タイムテーブル、資金繰り、など殆ど全て私が一人で行いました。もちろん、エフエム世田谷や世田谷区役所、児童館などのご協力を仰いだ上でのことです。これら最初の一步も高校生が行えば美しい話ですが、それを待っていたらおそらく2010年の今をもってしても青二祭はなかったでしょう。



第一回青二祭実行委員
ラジオで司会も務めていた2人組



青二祭会議風景 白熱した議論が飛び交う

正直に申し上げて、最初の一步というかお膳立てみたいな部分は大人側がやらないと、これだけの規模のものにはなかなか進まないのではないかと思います。

全て高校生が行っている、という美談になっても何ら参考にならないと

思うのでこの点だけは先に申し上げておきます。

祭りを自由に行っていていいという場所を得た高校生達は、そこから驚異的なやる気と熱意を見せ始めました。祭りのコンセプトや、パンフレットづくり、当日のスタッフの割り振り、司会進行、テーマソング作成、などどんどんフレッシュな意見が出てきて実行委員と出演者全員が一体となって祭りを作りあげていきました。なぜそこまで熱いものになったのか？もちろん、祭りそのものが魅力的なのだと思いますが、一番大きな理由としては、祭りづくりを彼らに「任せた」ことにあると思われる。

実行委員の会議を月に2度ほど行っていく上で、最初は区役所の方々と私が前に立ち、説明をして委員の意見を募ったりしていました。しかし、どうも皆受け身で意見も出にくく、「何か言われたら言われたとおりにやればいいですよ？」という感じでした。

そこで、3回目くらいの会議からは思い切って実行委員長(当時高校2年生)に会議の進行や全てを任せることにしました。同世代がリーダーシップをとり舵取りをし始めると、委員達もそれまでよりも「自分達で作っている」という感覚が出てきたようで、会議も熱を帯び始めました。委員同士、出演者同士もすぐに仲良くなり、みんなでいいものを作り



普段は路上で唄う2人組が大勢の前で弾き語り



ジャグリング観客をステージにあげて緊張の瞬間



拳をあげて熱唱！



ファッションショー衣装づくりもモデルも全て高校生！

上げようという連帯感が生まれてきたのです。居場所をつくる上での「雰囲気づくり」はとても大事で、これは大人側が上手に誘導していくといいようです。会議の場もなるべくあたたかい居心地のいいものにして、「会議に行くのが楽しみ」と思ってもらえるよう気を配りました。そして、委員長が全面的にとは言ってももちろん全てお任せではなく、大人は会議の様子を見守り、質問されれば答えアドバイ

男気あふれるダンスで
異彩を放つ!



回る回る!!



ダンスバトル 熱気に包まれた会場には一体感が

スをするなどして常に陰ながら支えていました。

当初から私が気をつけていることは、こちらの意見をおしつけないということです。高校生の考えていることを尊重し、まず彼らが何を思っただうしたいのか、耳を傾けるようにします。先にこちらの意見を述べるとそれは彼らにとって「こうなさい」という命令に聞こえてしまうようです。

自主性を重んじるという意味でも、まずは彼らに考えてもらいその上で道筋を提示する、ぐらゐの微妙な距離感を常に意識しています。

それと、なるべく彼らのいいところを見つけて「褒める」ことを心がけています。今の中高生は家庭でも学校でもなかなか褒められることがないよう

で、自尊心は人一倍強いのにとても自分に自信がなさそうです。ですからとにかく褒めて伸ばす!を念頭に置きました。

青二祭を通して感じたことは、今の日本、とりわけ東京には子どもの居場所(※キーワード参照)が極めて少ないということです。裏を返せば、中高生は場所さえあれば本来自分達が持っている以上のすごい力を発揮し、いきいきと自発的に物事に取り組むのです。

今の若者は覇気がない、とか礼儀を知らない、などメディアを中心にいろいろ言われているようですが、果たしてそれは彼らだけの責任なのでしょうか?何かやりたい、いろいろな人達と友達になりたい、と思っても学校には部活以外はそういった場所はなかなかなく、学校外だと塾などの勉強場所かカラオケなどの遊び場所、携帯やネットなどのみ。

実際何をやっていいのか、どこに居場所をみつけてどのように仲間を作っているかわからず心よりどこを探している中高生は多いと感じます。

ですから、大人側からこうした若者達に居場所を提示してそれらをあたたかく見守っていくというのは今後ますます重要になってくるのではないのでしょうか。

青二祭は過去10年間のOBOGとのつながりも強く、卒業してもOBOGが会議に顔を出して手土産片手に後輩を叱咤激励するなどしています。昨年は10周年を記念して現役高校生から社会人までの大同窓会も行いました。こうして、年齢の幅がある交流も生まれ、先輩達の後ろ姿を見て後輩達がいろいろ学んでいくとしたら、とても素敵なことだと思います。



ロビーでは絵画の作品展も



感動のフィナーレ テーマソングを委員、出演者が熱唱

最後に、10年の歳月を経た現在の青二祭ですが、ホール関係者や下北沢商店街、世田谷区役所子ども部、エフエム世田谷の後ろ盾を得てますます大規模なものとなり、今年で第11回目を迎えます。現在実行委員は約50名、出演者に至っては約80校・250名、ご父兄を含めた来客数は約1500名になります。年々実行委員の熱意は増し出演者のレベルも高くなり、バンド、ダンス、お笑い、ファッションショー、アカペラ、ダブルダッチ、ジャグリング(大道芸)、映像作品など、首都圏でハイレベルなチームが多数出演するお祭りとなってきたようです。

当日の司会進行、照明、受付、装飾、出演者の誘導、チラシやチケット、32ページに及ぶパンフレット作成、映像作品、HPの作成など全て高校生が行っています。パソコンが得意な人はエクセルを駆使して大人顔負けの資料を作り、また編集ソフトを使って制作した映像作品を発表したり、音楽やダン

〈第11回青二祭〉年間スケジュール

8月	次期委員長、幹部と打ち合わせ、 実行委員募集開始
9月末	第一回実行委員会議、 以後月1〜3回ほど会議 出演者募集(テープ郵送)開始
12月	テープ選考、 下北沢の各商店街理事長等へ挨拶
12月末	ダンス二次審査、ライブ二次審査 (ともに公開・観客あり)
1月	出演チーム決定、出演者説明会・親睦会
2月	ショーお披露目会、 エフエム世田谷番組内で青二祭特集 (青二祭関係者出演)
3月	第二回出演者説明会・親睦会、 下北沢MAP作成
3月下旬	青二祭本番

★第11回青二祭★

主催：青二祭実行委員会／FM世田谷 共催：世田谷区
2010年3月24日、25日@北沢タウンホールなど

4月上旬 | 出演者及び実行委員反省会、ビデオ鑑賞会

スを通して表現したり、街中でみる退廃的な若者達とは一線を画した、清々しく志の高い真摯な若者達による、熱いお祭りとなっています。



委員と出演者 青二祭終演後興奮さめやらぬまま集合写真

キーワード：子どもの居場所

若者、特に東京都内の若者達には居場所がありません。何をしてもどこに行くにもお金がかかり、人が多すぎる為ゆっくり人間同士対峙する環境が少ないようです。故にカラオケボックスやインターネットのコミュニティ・サイト mixi などに集い、ごくごく身内だけの殻に閉じこもります。彼らが安心して仲間を作る居場所、心が落ち着ける場所がもっと増えることを願います。

ストリートからステージへ。 アプサラを伝承する子どもたち

— NGO に見る保護児童救済活動



児童養護施設 房総双葉学園 園長
前淑徳大学総合福祉学部 准教授

おぎそ
小 木 曾 宏



はしぐち たつき
淑徳大学総合福祉学部 OB 橋 口 樹

1. カンボジアとはどのような国か

近年、日本のメディアに多く取り上げられている国の一つに、カンボジアがある。現在、カンボジアの首都プノンペンには高層ビルやデパートが造られ、近代化の道を辿っているが、一方で、国民の間の経済格差はますます広がっているように感じられる。首都から1時間くらい離れた村では、まだ学校が存在しない地域や、学校があっても教師がおらず教育が行きとどかない地域も少なくない。そして、最も大きな問題がストリートチルドレンと言われる子どもたちの存在である。

カンボジアには他の国とは異なる特殊な事情がある。それは1975年4月17日に遡る。その日、首都プノンペンに入城したのはクメール・ルージュ軍であった。そして、「革命」の名の下にかれらが行ったことは、避難民も含めて、国民を後に裏切ることになる。確かに、圧政に苦しみ内戦に明け暮れたカンボジア人にとって、初期のクメール・ルージュは

「人民解放」に向かう未来を託すものだったに違いない。しかし、そのカリスマ的な指導者として実権を握ったポル・ポトは、全く異なる方向に歩み出し、縁故主義に急速に傾倒し、「革命主義」の名の下に「恐怖政治」へと突っ走ることになる。「トゥーレス・レーン」や「キリング・フィールド」はその歴史の癡痕を昨日の如く、未だに蘇らせる場所となっていると同時に、拭い去れないカンボジア国民の歴史的トラウマとなっている。確かに東南アジアには、教育支援を必要としている地域が数多くある。しかし、カンボジアには加えてこの特異な歴史に負わされた特殊事情が横たわる。「旧体制」の知識人(教師と家族)や政治家は牢獄に送られ、処刑が繰り返された。その数は家族を含め、40万人とも60万人とも言われている。カンボジアは内戦や隣国からの圧迫を含め当時の混乱の中で、それだけでなくも学校教育が維持できない状況に拍車をかけて、現場から突如、教師がいなくなるという現実、その国の

悪臭を放つゴミ山。ここがストリートチルドレンの仕事場



大人達に混じってゴミをあさる子ども。
1日数10円の糧を得るために

「未来の崩壊」に他ならない出来事であった。

さらに、プノンペンに逃げ込んでいた200万の人々に対し、農村部に強制的に移動させ、長時間に及ぶ労働に従事させた。その結果、極度の栄養不良と餓死が常態化したという。

2. 「ゴミを拾う子ども達」の支援とは

カンボジアには「ゴミ山」と言われる場所がある。首都プノンペン、ストゥミンチェイ郡にある「ゴミ山」に私たちは毎回訪問する。そこに子ども達を支援する施設がある。「Vulnerable Children Assistance Organization」という施設で、そこはゴミ山から来る悪臭が常に漂う場所でもある。昨年、9月に訪問した際、大雨に見まわれ、グランドから施設まで辿りつくことさえ困難な状況であった。

周辺一帯は、1日400台以上のゴミ収集車が行きかう。多くの大人たちに混ざって、子どもたちもゴミを拾う。たとえば、空缶は10個で100リエル(2.5

円)、空瓶は4個でやはり100リエルと、1日拾い続けたとしても数10円にしかならない。現在、この施設は世界各国から支援を得て、数時間単位の教育プログラムを提供している。たとえば、午前中は就学前の子どもたちで、この施設に来ればジュースやパンの支給もある。午後は、昼間、労働に従事した高学年の子どもたちのためのプログラムを提供している。

子ども達が学校に行けない理由として、「児童労働」問題がある。決してカンボジアだけの問題ではなく、大人達さえ職がなく、生活することすらままならない。そこで、子ども達が「労働力」と考えられている現実がある。ILOの調査報告によれば世界で「約2億4600万人の子どもたち(5歳-17歳)が労働に従事している」とされ、この数は〈世界中の子どもたち6人に1人〉にあたる数字となっている。そして、ゴミ拾い等、最も深刻な状況として、〈最悪な労働〉に従事させられている子どもたちは世界

で約1億7100万人いると報告されている。

3. アプサラダンスを伝え続けること

カンボジアでは、どのくらいストリートチルドレンがいるか、正確には把握できない状況だという。そのような状況にある子ども達に対して具体的にどのような支援が行われているかと言えば、母国語であるクメール語(カンボジア語)や、英語、日本語、数学などの他に、ミシンやパソコン等の職業訓練を授業で行う。そして、カンボジア伝統の舞踊であるアプサラダンスの練習も、その一つである。

私たちは、カンボジアの現実を目の当たりにして、多くの課題を感じる一方で、そのアプサラダンス(以下アプサラ)の魅力に大いに囚われた。本場のアプサラは、アンコールワット遺跡のあるシェムリアップという都市で、ディナーショーなどで演じられていて、観光客の多くがその伝統舞踊を鑑賞する。

ダンサー達は華やかな衣装を身に纏い、魚や猿や孔雀などの動物を演じつつ、独特の音楽に合わせて演じられる。その華やかなダンスに観光客は魅了される。華やかな一流ダンサー達は、ストリートチルドレンのみならず、アプサラを伝承しようとしているカンボジアの子ども達にとって憧れであり夢でもある。

もともとアプサラの起源を辿ると、王宮でのみ踊られていたが、王様に対して見せるものでなく、神に対して国の安泰や王の願いを届けるための踊りであった。王宮で踊るこのダンサーは、天女や天使と言われており、国民にとっては憧れ以上のものである。それでは、ストリートチルドレンに、そのようなアプサラを伝承していく意味は何なのだろうか。

ひとつは国の文化復興政策の一環である。もう一つは、大変過酷な状況にあっても、子ども達に夢を与え、努力することで、いつか自分もダンサーになりたいという思いだけでなく、カンボジア人として

の自信と誇りを体得していくことに繋がる、ということである。

そして、カンボジアにはアプサラを子ども達に教える場所がたくさんある。私たちも旅の途中、ある教室を訪問した。そこはスラム地区にあった。土曜日になると子ども達は三々五々、集まって来る。そこで稽古の様子を見させて頂いた。幼児から小学校低学年までの子どもには基本的な身振りや手振りを何度も繰り返す。次に小学校高学年以上の子どもは実際に音楽に合わせて踊りを習う。先生だけでなく、年上の子が年下の子どもに踊り方を教えていく「子ども間の伝承」もあった。その教室では、昼間、厳しい稽古をしているが、夜は入場料をとって、市民や観光客にアプサラを披露している。実はその収入が、子ども達の生活費や教育費に当てられるという。子ども達の家庭は大変貧しく、ストリートチルドレンもいると知らされた。

私たちが見ている、長時間、かなり厳しい練習だと感じられた。しかし、子ども達の表情は「苦しい、いやだ」と歪むことはなく、真剣そのものであった。単なる「習い事」の領域を超えていた。この教室を運営している方は、実際に以前王宮でアプサラを踊っていた方だったが、「生活がかかっているからだけではない。お客様として招き入れる人に成果を見せるため、そして満足してもらうためにやっていることですから」と語ってくれた。きっと、観客の拍手や歓声があるから、厳しい稽古も子ども達は厭わないのだろう。その上、努力することの大切さや人から認められる喜び、日常の生活では感じることでできない自己を認めてもらえる場だからでもあった。

カンボジアの現状に立ち戻れば、「児童労働問題」と「学校や教育支援環境の未整備」の問題がある。2005年のカンボジアの小学校就学率は都市部では



スラム近くにある教室でアプサラの練習に励む子ども達



アプサラダンサーを夢みる子ども達。その練習は真剣そのものだ (SCADPにて)



91.6%であり、過疎地では82.5%である。さらに、中学校就学率になると都市部では41.3%となり、過疎地はなんと3.9%になってしまう現実がある。学校に通いたくとも通えない子ども達が多く存在する。子ども達は、教育を受けていく中で、あるいは生活していく中で、将来の夢を見つけ、自己実現を図っていく。しかし、教育を受けることができないために、その夢の実現の道を知らぬまま働かされているとも言える。

「もっと勉強したい。私には夢があるから」という声を、私達はたくさんの子どもの口から聞いてきた。しかし、先ほど説明したように、授業料が払えないどころか、生活費さえまならない家庭が多くある。やはり、中学生にもなれば、もう家族の大黒柱として、働ける存在であると期待もされている。教育支援の未整備に加え、このような貧困問題と児童労働の問題という二重、三重のカベが子ども達にのしかかっている。特に過疎地では、子ども達には過酷すぎる農作業が中心で、子ども達の夢や未来がそこでも見つけられない現実があった。

4. 新たなひかりの彼方に

2008年9月(第3回)のスタディツアーによって「非正規教育機関」の実践活動を知ることになり、以来その活動支援も行ってきている。その支援団体

は、カンボジア人であるソッカリさんという女性代表が運営する「Street Children Assistance and Deveropment Programme (SCADP)」であった。

SCADPは1992年12月25日にボランティアグループとしてストリートチルドレンの基本的なリテラシーを教育するために開始された。主な活動として、保育センターや教育センターを立ち上げ、カンボジア政府からNGO活動ではあるが「ストリートチルドレン支援プログラム」として公式に承認を得るまでに至っている。そして、単に直接的に奨学金を与えるような支援だけでなく、カンボジアの抱える根本的な社会問題の変革も必要だとして、包括的な子どもの保護及び支援施策を見据えた活動を展開している。

首都プノンペンに、この支援団体の事務所がある。そこで、詳しい支援活動内容を伺うことができた。具体的な活動としては、教育支援や、健康・保健衛

生、子どものための家庭環境強化、過疎地の生計維持力向上の支援などを行っている。前述したように、教育支援の未整備や貧困問題、児童労働問題を少しでも改善すべく、活動を行っている。子ども達への教育は必要であり、生きるための選択肢を広め、文化を楽しむことが大切であること——これが、子ども達の生きる権利であるという。

この団体は教育支援にとどまらず、直接家族に対しても子どもが勉強できる環境をつくっていきけるように応援している。やはり親たちが教育を受ける意義を理解していなければ、教育に対して否定的になる。たとえば親が文字を読めない場合は、重要な手紙を送っても読めないという。そこで大人にも文字を教えるという活動もしている。そこから大人(親)に対する教育支援にもつながっていくという。

過疎地のために教育を受けられず、病気や怪我の対処法を知らない大人、妊娠や育児に関する知識を知らない妊婦たちの支援も行っている。彼女たちの住む地域では、知識不足ゆえに生命を落としたり、乳児の死亡率が非常に高い。

その他にも、働きたくとも技術を身につけることが困難な大人に、建築技術やミシンの使い方を教える支援も行っている。

このように全ての人に、学ぶことの大切さを知り、教育に対する必要性を理解してもらう努力をしている。また、この団体はストリートチルドレンに日本の生活保護にあたる資金的援助も行っている。

SCADPでも子ども達にアプサラを教えているので、ぜひ演技を見て欲しいという。ここでのアプサラは衣装も本格的なものだった。伝統音楽が流れ始めると、子ども達は真剣な表情に一変する。ダンスが始まると近くの住人が集まってくる。そこで私たちは、改めてアプサラは特別なものであることがわかった。次第に子ども達の表情は緊張しながらも自

信に満ちたものになっていく。演技が終わり拍手、歓声に包まれると踊りを終えた安心感と同時に、また子どもらしい顔つきに戻っていた。

「ストリートチルドレンだから」、「親が居ないから」、「親がゴミ山で働いているから」、「お金がないから」、「学校がないから」、そんな、私たちからすれば厳しい状況で生活する彼らにも、教育を受ける権利やより良く生きる権利は当然ある。しかし、現実的にカンボジアの家族や大人たちも家族を守ることが困難な状況である。一方で、ここで紹介できた国内の支援団体も各地で動き始めている。しかし、その現地スタッフは、ほとんどがボランティアである。職業を持ちながら支援に関わらざるを得ない。そこで、私たち日本からの継続的なボランティア活動も必要であると実感し、検討を始めていた。そんな矢先、SCADPのソッカリ代表から長期ボランティアの派遣要請があった。そこで、橋口君を卒業後の2010年4月から6ヶ月間、日本語教育ボランティアとして派遣することが決定された。私たちのこの活動も次のステージへと展開していくであろう。そして、まだまだ多くの協力や支援が必要になってくる。私たちもできる限り応援したいと思っている。

なぜならば、アプサラダンスは神に捧げる聖なる踊りであり、カンボジアの地に、いつか平和で幸せな社会が来ることを祈るものだから…。

(2009年12月)

参考文献

上田広美 岡田知子編著『カンボジアを知るための60章』株式会社明石書店 2007

キーワード：アプサラダンス

カンボジアで9世紀頃に生まれた宮廷舞踊。アプサラとは「天女・天使」のことで、神への祈りとして捧げられる。指先を反り返す、片足立ちのポーズなど特色ある優雅な動きで、ラーマーヤナ物語や魚捕りなどの日常生活が表現される。ボル・ポト時代に弾圧されたが、現在復興が進む。

編集後記



担当編集委員 片岡玲子

文化財」をテーマとしました。2002年4月発行の第52号で「子どもと遊び・文化」という特集がありますが、このとき以来の文化ということで、前回にもまして多彩な執筆者にお願いすることができました。

子どもの文化の歴史を書いてくださった子どもの文化研究所長・片岡輝氏、子ども文化財のさまざまな領域から、絵本については安曇野ちひろ美術館・竹迫祐子氏、映画は児童健全育成財団の鈴木一光氏、そして舞台芸術については「子供のためのシェイクスピア劇」を毎年演出し、俳優としても活躍しておられる山崎清介氏、こどもの城でオペレッタを演出されている高谷静治氏、また児童福祉文化財について厚生労働省の児童健全育成専門官・齋藤晴美氏、

今号の特集は「子どもと子どもの文化財」です。「子育て」や「食育」など、どちらかという子どもへの直接的関わりをテーマにしたものが続いてきましたが、今回は少し視点を変え、「子どもの

児童館関係の研究者の方々。そして児童養護施設で行われている文化活動の実践も盛りだくさんになりました。

子どもたちのところに響く文化財を届けたい。大人のできることは何か。そして子どもたちの身近にそれを届けるしくみづくりなど課題もたくさん見えてきます。

私事にわたりますが、私の母は晩年、少年院の少女たちに刺繍を教えるボランティアをしていました。「ひなまつり」を祝ってもらったことがないという少女の言葉をきいて、おひなさまの刺繍を伝えたいと思ったようです。おひなさまを創るところまではいかなかったのですが、美しい糸でひと針つつ縫い取る刺繍を、少女たちが嬉しそうにこころ躍らせてしている様子をよく話しました。

今年もひなまつりの時期ですが、西でも東でも子どもの被虐待死のつらいニュースが流れています。大人のできることもっと考えたいと思います。

お忙しいなか、快くご執筆くださいました執筆者の皆さまにこころより御礼申し上げますとともに、この冊子が少しでも子どもと接する皆さまのお役に立つことを願っております。

(2010年3月3日)

〔編集委員長〕

あみ の たけ ひろ 東京家政大学家政学部
網 野 武 博 児童学科 教授

〔編集委員〕

おお た いっ べい 児童養護施設八楽児童寮 寮長
太 田 一 平 社会福祉法人和敬会 理事長

おか もと まさ こ 大阪教育大学教育学部 教授
岡 本 正 子

お ぎ そ ひろし 児童養護施設 房総双葉学園
小 木 曾 宏 園長

かた おか れい こ 立正大学心理学部 教授
片 岡 玲 子

さい ごう やす ゆき 大正大学人間学部
西 郷 泰 之 人間福祉学科 教授

うち だ たか ふみ (財)資生堂社会福祉事業財団
内 田 隆 文 理事長

(敬称略・五十音順) 編集事務局：市川美保

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.68 2010-4 世界の児童と母性

年2回発行

2010年4月1日発行

編集・発行者

財団法人 資生堂社会福祉事業財団

〒104-0061 東京都中央区銀座7丁目5番5号

電話 03-3574-7408

ファクシミリ 03-3289-0314

URL <http://www.zaidan.shiseido.co.jp>

印刷所 成旺印刷株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2丁目1番28号

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

財団法人 資生堂社会福祉事業財団
